木の葉のワンコ娘

冬山　楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
木の葉のワンコ娘

【Ｎコード】
Ｎ９６５５Ｚ

【作者名】
冬山　楽

【あらすじ】
犬塚家の次女が木の葉の里で頑張るお話し。
恋愛したりバトルしたりと大暴れ！！
シカマルに想いを寄せるブラコン姉さん、いざ参る！！

木の葉のワンコ娘（ストーリー、キャラ設定）

この小説は、原作沿い＋オリジナルの設定の夢小説です。

シカマル落ちです。

主人公以外の恋愛要素もあります。

最初はオリジナルから入り、原作は一部の中忍試験開始から始まります。

次は夢主&ａｍｐ；オリキャラ紹介です！！（話が進むとキャラの追加や設定の追加があります）

主人公

「犬塚ミミ」

犬塚家の次女でキバの一つ上の姉。

家族を大切にしている。

母や姉、忍犬達も好きだが、一番はキバ。

キバ大好きな超がつくほどのブラコン。

明るくて優しい性格。（ただし、弟が傷つけられたりするとかなり怖い）

小さい子に好かれやすい。

愛犬（忍犬）は、赤丸と同じサイズの柴犬、『茶々丸』。

ネジ達の同期。

実は下ネタが苦手。

シカマルのことが好き。
戦闘スタイルは基本的にキバと同じ。

「水鳥シミズ」

ミミと同じチーム。
毒舌ドSな性格。
初対面だろうが年上だろうが容赦ない。
カノンを虐める（弄る）のが好き。
冷たいように見えるが、実は結構仲間思い。
ミミとカノン、ヤイバは、かけがえのない存在。
意外にも甘い物が好き。
戦闘スタイルは、水遁と毒を使う。

「火堺カノン」

ミミと同じチーム。
ヤイバ班のツッコミ役で苦労人。
ミミのブラコンや、シミズの毒舌に振り回されたり、厄介事に巻き込まれたりなど、不憫体質。
ヒナタに想いを寄せている。
リーとは仲の良い友達で良きライバル。
戦闘スタイルは、火遁と体術を得意とする。

「ヤイバ」

ミミ達の担当上忍。
寝ることが好きで、どの時間帯でもどの場所でも基本的に寝れる。

普段は温厚で、怒ることも少ないのだが、睡眠を邪魔されるとブチギれる。
カカシの後輩。
戦闘スタイルは、刀を武器として戦う。
実力は今の所不明…。

先程あげたように、ストーリーが進むと、キャラが増えることがあるので、増えたら新しくキャラ設定を追加するのでよろしくお願いします！

それから、この小説は一応、一部で終わる予定です。
もし、二部の方も書いてという要望があった場合は、作ろうかと考えています。
ですが基本的には一部設定のまま終了する予定です。
では次からお話しに入っていきます！！

第1話「犬塚家のお姉ちゃん」

火の国、木の葉隠れの里のとある家…

「お母さん！ハナ姉さん！」

バタバタと階段から降りてくる少女に二人はため息をつく。

「あんたの言いたいことは分かってるよ。アカデミーの卒業試験のことだろう？」

母のツメがそう言うと、少女はビシッ！と指をさす。

「そう！今日はアカデミーの卒業試験！！愛しのマイブラザーがついに下忍になる日だよ！！」

「まだ卒業するとは決まってないでしょう」

「そんなことないよ！！キバは絶対受かるわ！！！」

そう言うと少女はムカつくくらいのどや顔を披露する。
そんな少女に柴犬が足元にスリスリとすりよってきた。

「キバがもうすぐ私と同じ下忍…あーーっ楽しみ！！ねぇ、茶々丸！！」

「ワン！」

「ほら、いつまでもはしゃいでないでさっさと着替えてご飯食べなさい、ミミ」

「はーい！！」

先程から騒がしいこの少女…彼女の名は犬塚　ミミ。
犬塚家の次女で、立派な下忍だ。
彼女の側にいる柴犬の名は茶々丸。
彼女の愛犬だ。
なぜ彼女がこんな朝っぱらから騒がしいのか…その原因は弟のキバがアカデミーの卒業試験を受ける日だからだ。

―忍者アカデミー前

「キーーーバーーーー！！！」

卒業生とその家族が集まる中、ミミは愛しの弟を見つけると素晴らしいスピードで弟に近づき、思いっきり抱き締める」

「うわっ！ミミ姉ちゃん！！」

「卒業おめでとー！！キバはやっぱりお姉ちゃんの自慢の弟だよ！！」

キバの額につけられた木の葉のマークがついた額宛を見て嬉しそうに言う。

「あったりまえだ！！俺もこれから姉ちゃんと同じ下忍だぜ！」

ミミに褒められ、ニカリと笑いながらキバは言う。

（あああぁ！！可愛いキバ、ホントに可愛い…！！）

そんなキバにミミは内心暴走気味だった。（オィ

ピクリ…

「……」

「姉ちゃん…？」

「キバ、後でお姉ちゃんと茶々丸達の散歩しようか」

「よっしゃーー！！」

「あっちにお母さんとハナ姉さんがいるから行って卒業したって報告してきなさい」

「おぅ！」

そう言ってキバはミミが指さした方向へ走って行った。

「…さてと」

キバを見送ったミミはある人物の場所へ走って行く。

「アカデミー合格おめでとう、シカマル」

「…あぁ」

父のシカクに言われ、少しきだるそうに返事するシカマル。
すると…

「シカマルーー！！」

「うぉっ？！」

シカマルの背中にタックルしてきたのは先程キバと一緒にいたミミだ。

「シカマルもアカデミー卒業したんだね！おめでとー！！」

「み…ミミ?!」

自分にタックルしてきた人物を見て驚くシカマル。

「やぁ、ミミちゃん。相変わらず元気だね」

「シカマルのお父さん!こんにちは!!」

「…何しにきた…って、どうせキバのことだろ…」

「もちろん!!」

胸を張って何故か威張るように言うミミにシカマルはため息をつく。

「もー何ため息ついてんの!!幸せが逃げちゃうよ?」

「頭撫でんな」

ため息をつくシカマルの頭を撫でるとシカマルにその手を振り払われる。

そのやり取りを、シカクはニヤニヤしながら見ていた。

「ふふっ、私これからキバと茶々丸達の散歩に行く約束してるから!じゃあねシカマル!!」

そう言うと、ミミはその場を素早く去って行った。

去り際に『今行くよマイブラザー!!』っと、叫んでいたミミにシカマルはまたため息をつく。

「嵐のように突然来たと思ったら嵐のように去って行ったな…たくっ、相変わらずめんどくせー奴だな…」

（キバもシカマルも無事アカデミーを合格…けど、まだ本当の意味で合格したわけじゃないからね…）

茶々丸を優しく撫でながらミミは目を細めた。

「まぁ、キバとシカマルなら大丈夫だろうけどね！さーて、キバと赤丸と散歩に行こうか、茶々丸！」

「ワンワン！！」

そう言ってミミは元気よく飛び出して行った…。

第1話「犬塚家のお姉ちゃん」（後書き）

はい！！第1話目からグダグダです！！
こんな感じの連載をしていくので、こんなんで良かったらお付き合いくださいませ！！

第2話「お姉ちゃんのチームメイト」

―犬塚家

「キバ、今日は一緒に任務をするためのスリーマンセルの班決めらしいね」

母と姉が朝早くから任務に行っていて、家にいるのはミミとキバと愛犬を含めた忍犬達。
忍犬達と朝食をとりながら、ミミはキバにそう言う。

「そうだぜ！誰とチーム組むか楽しみだな！！」

「キバはこの人と組みたいとかあるの？」

「あ～…基本誰でも良いけど、ナルトとだけは組みたくねえな」

「なんで？」

「アカデミー生の中で一番のドベだから。絶対足引っ張られる」

「ふーん…」

キバの答えに相槌をうちながら朝食を食べる。

「ミミ姉ちゃん、行って来まーす！！」

「行ってらっしゃい、気をつけてねー！」

朝食を食べ終わったキバは、ミミに見送られながら元気よく飛び出して行った。

「さて、家の掃除したらいつもの演習場に行くか」

そう囁くと、ミミは腕を捲り、家の掃除を開始した。

「！！…きたか…」

「おせーぞミミー！！」

「ごめ～ん！！」

掃除を終え、演習場に行くと二人の男がミミに向かって手をふっている。

「あれ?ヤイバ先生は?」

「多分、またどっかで昼寝してると思う」

「先生が言ったことなのに?!」

「いつものことだ、先に俺ら三人で演習するか」

「そうね…いくわよ!!シミズ!カノンも」

「「おぅ!」」

ミミの言葉を引き金に三人は戦いの体制に入る。

さて、今ミミと一緒に修行している二人の男…。
彼らはミミとスリーマンセルを組んでいるチームメイトだ。
水色の髪をした少年の名は水鳥シミズ、オレンジ色の髪をした少年の名は火堺カノンと言う。
どちらもミミが心から信頼できる人物だ。
修行も中盤にさしかかったその時…。

「すまねぇなお前ら、寝坊した」

演習場に突然煙がまう。
煙の中から出てきたのは、深緑色の髪をした青年だ。

「「「先生!!」」」

そう。この青年　こそミミ達の担当上忍、釦ヤイバだ。

「もう!昼寝も良いけど修行しようって言ったのは先生の方なんだから!!時間守ってよ!!」

「悪かったって」

「まぁ先生も来たことだし、修行再開しようぜ」

「よし、手加減せずかかってこい」

ヤイバがそう言うと、再び戦闘体制に入る。
彼らの実力はなかなかのものだが、その強さは今はまだ語らず、近々明かしていこうと思う…。
こうして彼らの修行は夕方まで続いた…。

（キバ、仲間ってとても大事だよ。誰と組んでもキバにとってかけがえのない仲間になるはずだよ…今の私達みたいに…）

第2話「お姉ちゃんのチームメイト」（後書き）

1話目よりもグダグダ！！
原作に入るまでは、こんな感じのオリジナルです。
なんとか頑張って書いていきます。

第3話「お姉ちゃんの同期生」

「おまえら、今日はガイさんとこの班と合同演習だ。俺は別のようがあるからおまえらだけで演習場に行ってくれ」

朝の8時。
担当上忍のヤイバがミミ達にそう告げると、すぐさま火影邸に向かった。

「あの暑苦しい奴の所に行くのかよ、ふざけんな死ね」

「シミズ…（汗」

ブツブツ文句（というか毒舌）を言うシミズをカノンは冷や汗を流しながら見る。

「う～ん、確かにガイ先生は暑苦しいけど、久しぶりにテンテン達に会えるから私は良いと思うよ。ここ最近、ガイさんの班とは任務とかですれ違いになったりしてなかなか会えなかったから」

そんな雑談をしながら三人は演習場へ向かった。

「はっはっはっ！！せーしゅんしてるかーーー！！！！」

三人が演習場に着いたその直後、目の前にガイが現れ親指をグッとたて、まっしろな歯をキラリと見せ、そう言い放つ。
いきなり現れたガイに三人は思わず一瞬固まった。

（あ、相変わらず濃い…（汗）

（良い人ではあるんだけど…（苦笑）

（まじうぜー…喋れなくしてやろうか）

ガイに対してそんなことを思いながら演習場の中心を見ると、ミミ達の同期生がすでに演習を行っていた。

「テンテン！！ネジとリーも！！久しぶり！！」

ミミが元気よく三人に向かって手を降る。

「きたか…」

「！　ミミ！！」

「シミズくんとカノンもお久しぶりです！！」

ネジ、テンテン、リーの三人はミミ達の姿を確認すると一旦演習を止め、自分達に近づく三人を暖かく出迎えた。

「ミミ、シミズ、カノン！！ヤイバから話は聞いている。今日は我が教え子達と存分に演習に励んでくれ！！！」

「「「はい！！！」」」

三人はネジ達と向かい合い、お辞儀をすると、すぐさま彼らから距離をとり、戦闘体制に入る。
ネジ達も同様に戦闘体制に入る。
テンテンがクナイを投げ、ミミもクナイを投げ、二つのクナイがぶつかり弾き飛ばされた瞬間、全員一斉に動きだした…。

「ハァ…さすがテンテン。武器の扱いが上手。油断したら串刺しになっちゃうかも…」

「ミミこそ腕をあげたわね。また一層スピードが上がったわ」

ミミはテンテンから繰り出される数々の忍具をかわし、自慢のスピードでテンテンに攻撃を仕掛けるが、トンファーで受け止められる。

「くっ…！！相変わらず良いスピードだなリー。これで重り付なんだよな…っ」

「カノンこそ、素晴らしい体術です！！君もまたたくさん努力して修行していることが拳から伝わってきます！！青春です！！」

カノンとリーは体術のぶつけ合い。
攻撃しては避けられ、攻撃しては受け止められることの繰り返し。
どちらも良い勝負をしている。

「さすがは日向…と言ったところか。接近を許せば点結を突かれる…敵に回したくねぇな」

「そのわりにはあまり焦っていないな。攻撃しようとしてもうまく距離をあけられる…」

ネジからなるべく距離をとり、遠距離で攻撃するシミズ。
その攻撃を軽くかわし、接近戦に持ち込む機会を伺う。
それぞれの戦いは決着がつかぬまま夕方になった。

「ガイ班の皆、今日は演習に付き合ってくれてありがとう！！」

演習を終え、泥だらけになった姿で綺麗に笑い、そう言うミミ。

「おう！みんな実に青春していた！！ミミ、シミズ、カノン！！またいつでも我が教え子達の相手になってくれ！！！」

ガイはいつものポーズをとり、そう言い放つ。

そんなガイの姿にミミ達は再び苦笑い（約一名は冷たい眼差しで）

「あっ、そう言えばもうすぐ中忍試験が始まるみたいね」

テンテンの言葉にミミ達はあぁ…と頷く。

「もうそんな時期か」

「確か今回は参加するんだよね？私達。もちろんテンテン達もだよね？」

「ええ、そうよ　」

（キバやシカマル達はまだルーキーだし、経験を積んでから参加するんだろうな～…一緒に参加したかったなぁ…）

ミミはこっそりため息をついた。

今年はルーキー達全員が中忍試験に参加することを知るのはもう少し先の話である…。

おまけ

―昼休憩時

ミミ「でさぁ、愛しの弟が額宛を見せて満面の笑みを浮かべた時は凄かった!!天使!キバは私の天使だよ!!」

テンテン「また始まった…」

リー「ミミさんと手合わせしたりするのは好きなんですけど…」

ネジ「休憩に入る度に弟の話ばかりしてくるのは鬱陶しいな…」

カノン「俺とシミズはもう聞き慣れちまったよ…」

シミズ「病気だな病気。ずっと病院で隔離されれば良いと思うぞ…」

ミミ以外『ハァ……』

終われ

第3話「お姉ちゃんの同期生」（後書き）

戦闘シーンを書くのは難しいですね（汗
てかオマケのお姉ちゃん暴走しすぎた感が否めません…。
もうちょっと落ち着かせた方が良かったかも知れません…。
次はシカマルと絡ませたいと思っています！！

第4話「お姉ちゃんとシカマル」

―森の中

「キバ、チームメイトとは仲良くしてる？」

「おう！良いチームだと思うぜ！！な？赤丸！！」

「わん！」

キバが正式な下忍になり、同じ班の人達と任務を行い初めてから3日目になった。
キバのチームメイトは日向ヒナタと油女シノ。
担当上忍は夕日　紅と言う女性の上忍らしい。

「しかし、キバのチームはなんか感知タイプの子ばっかだね。まさに探索のスペシャリストってところかな？」

「そうかもな」

ミミとキバは森の中を激しく散歩しながら喋る。

（確か卒業生の中から選ばれるルーキーは3チームまでだったよね…その内の1チームがキバ達の班だから…あと2チームはどこなんだろう…）

「飛ばすぜ赤丸ー！！」

「わんわん！！」

スピードをあげたキバと赤丸に、ミミと茶々丸もスピードをあげる。

（シカマルのチームは確実に入ってるはず…となると、残りの1チームが気になるな…）

キバ達と散歩をしながらミミはそんなことを考えていた…。

「え～っと、今晩のメニューの材料は…」

キバ達と朝の散歩を終え、商店街で今日の晩御飯の材料を買いに来ていた。

その時、ミミの知っている匂いがした。

その匂いを辿っていくと…。

「…シカマル？やっぱりシカマルだ！！」

「あ？…ミミじゃねぇか」

自分に近づいてきたミミに気づいたシカマルはふあぁっ…と欠伸をしながらミミを見る。

「こんな所で何してるの？」

「母ちゃんに頼まれて買い物。めんどくせーけど、ちゃんとやらねぇと怖いからな、うちの母ちゃん…」

「ははは！そっか。そういえばさ！！シカマルは合格したの？アカデミーに送り返されてない？」

「あぁ…一応合格した」

「だよねー！！シカマルなら合格すると思ってたんだー！！」

「ハァ？なんでそう思ったんだよ？しかもそんな自信満々に…」

「あなたはめんどくさがったりしなければできる男だから！！それに合格しなかったから困るし」

「なんでお前が困るんだよ」

「え？！それは…えっと…」

「？どうした？」

「なんでって…合同任務とかで一緒になれるかも知れないし…それに…その…」

だんだん言葉が小さくなるミミにシカマルは首を傾げる。

「～っと、とにかく！！／／／下忍になったからには少しはめんどくさがらず頑張りなよ！！」

「あ～はいはい…」

「はい、は一回！！」

「めんどくせーな…」

ミミは少し頬を赤らめながら、シカマルとそんなくだらないやり取りをしていた。

（うぅ～／／／普段は普通に抱きついたりしてるくせに…私のバカ！！！）

ミミの心の中の葛藤を、シカマルは知る余地もない…。

第４話「お姉ちゃんとシカマル」（後書き）

スキンシップはするのに、言葉にするのは恥ずかしい変人なお姉ちゃん。
原作突入まで後少し…！

第5話「砂忍との出会い」

「もうすぐ中忍試験始まるね～」

「昨年は力をつけるために参加しなかったからな。頑張って合格してやる！！」

「まったく、普段の任務の功績で中忍を決めれば良いもの…わざわざ試験で決めるなんてまじウゼェ…中忍試験考えた奴地獄に落ちれば良いのに…」

「「……（汗」」

シミズの毒舌を聞いて苦笑いしかできないミミとカノン。

「ま、まぁそう言わずにがんばろうぜ！」

「そうそう……！！」

「？　どうしたミミ」

周りをキョロキョロと見回すミミに気づいたカノンが声をかける。

「…この里に違う里の人間がいるわ…」

「おそらく中忍試験を受けにきた忍だな」

鋭い嗅覚で察知したミミに対してシミズはそう答える。
その時、ミミの近くにいた茶々丸が走り出す。

「え?茶々丸?!」

「違う里の忍の所に向かってるなあれは…どうする?」

「もちろん追いかけるわ。それに、どんな奴らかちょっと気になるし」

「それもそうだな」

三人は走り出した茶々丸を追いかけることにした。

「茶々丸?」

茶々丸が止まったのを確認したミミ達は、ゆっくりと歩きだし、茶々丸が見ている方を見ると、六人の忍と子どもがいた。
六人の内三人は同じ木の葉の額宛をつけており、残りの三人は違う里の額宛をつけていた。

「あの額宛って…」

「木の葉の同盟国、風の国の砂隠れの忍だな…」

ミミとシミズが小声で話していると、カノンが二人の肩をトントンと叩く。

「あそこにいる黒髪の奴…あいつ、今年のＮｏ．１ルーキーのうちは一族の奴じゃねぇか？」

その言葉に二人はカノンの指さした人物を見ると、背中の服にうちわの模様が描かれている。

「確かに…間違いないな」

（へぇ～、最後の一班があのうちは一族の忍が率いる班だったなんてね～。これは手強い相手ね、キバ、シカマル…）

気配を消しながらそう話していると…

「クゥン…」

「！！…茶々丸…？」

茶々丸がミミの足元に怯えながらすりよってきた。

「…シミズ、カノン。茶々丸があのひょうたんを背負った忍に怯えているわ…あいつ…相当強いわよ…」

茶々丸の頭を優しく撫でながら二人にそう言う。

「だろうな…」

「！　おい、砂の奴らがこっちに来るぞ」

「挨拶くらいした方が良いかな？」

「のんきだなミミ…」

「俺は構わないぞ。奴らの心をズタズタにするような挨拶を披露する気満々だからな…（ニヤリ」

「頼むから問題だけは起こさないでくれ…相手が同盟国ならなおさら…」

そうこうしている間に砂の忍達は三人の姿をとらえた。

「あっ、気づかれた…えっと…こんにちわ？」

「（なんで疑問系なんだ…）お前ら中忍試験を受けに来たんだろ？木の葉の里は良い所だからゆっくりしていってくれ」

「……」

スッ……

「が、我愛羅…」

我愛羅と呼ばれた瓢箪を背負った少年は三人には目もくれず、その場を去ろうとする…。

―ガッ

「こいつらがわざわざ挨拶してるのに、何も言わずに立ち去るとは…どういう教育してんだよ」

（おいいいぃぃ!!!）

「……気安く触るな…殺すぞ…!!」

ゾクッ…

「…っ」

「（この殺気…ヤバい!!）俺のチームメイトが失礼なことをした!!ほら、シミズ「気にくわなかったら殺気で脅して黙らせようとかバカなのか?なんでも自分の思い通りになるとでも?いっぺん病院に逝ってきたらどうだ?頭の方の」

「何やってんだシミズーー!!!火に油注ぐどころか起爆札投げ込みやがった!!てか‘いく’の漢字違うから!!!!」

シミズの毒舌に我愛羅はしばし彼のことを睨み付ける。

我愛羅と一緒にいる二人は青ざめた顔で我愛羅を見る。

まさに一触即発の雰囲気になっていた…。

しかし…

「…ククク…おもしろい…お前…名は？」

我愛羅は殺気を出すのをやめた。

「俺の名前を聞く前にお前から名乗りやがれ狸野郎」

「…我愛羅…砂漠の我愛羅だ…」

「我愛羅…俺の名は水鳥シミズだ」

「水鳥シミズ…覚えておこう…ククク…うちはサスケに水鳥シミズ…中忍試験が楽しみだな…」

そう言うと我愛羅は三人を通り抜け、先に進む。

我愛羅と一緒にいた二人はしばらく呆然としていたが、我にかえると我愛羅を追いかけようとするが…

「ちょっと待って!!もし良ければ…あなた達の名前も聞かせてください…!!」

我愛羅の元へ行こうとしていた二人に、ミミは名前を尋ねる。

二人はミミの言葉にキョトンとした顔つきになる。

「あ、あぁ…私の名はテマリだ」

「俺はカンクロウ。まぁよろしくじゃん…」

「私は犬塚ミミ！！よろしくねテマリさん、カンクロウさん！！」

ミミは笑顔で答えた。

「はぁ～。シミズがあんなことするからどうなるかと思ったぜ…」

「中忍試験に行けばまた会えるんだよね！楽しみだなぁ」

「厄介だな…さっき罵声を浴びせるだけじゃなくてそのまま潰しとけば良かったな…」

「んなことしたら同盟が破棄されちまうだろ！！」

「大丈夫だカノン。今のは冗談だ…半分な」

「残りの半分は本気かよ！！？」

「試験会場に行ったらキバの話をいっぱい話さなきゃ！」

「お前はそればっかりだな?!」

好きがってなことばかり言うミミとシミズにカノンは胃の辺りを押さえた。

こんな三人組が中忍試験でどう活躍するのか…それはまだ誰にも分からない…。

第5話「砂忍との出会い」（後書き）

砂忍と絡みましたね。
微妙に原作沿いですね。
そしてシミズの口の悪さが半端ない…！！！
我愛羅にとんでもないことを言うシミズはなんて怖いもの知らず…。
次回はとうとう原作に突入！！

第6話「中忍試験開幕」

「お前ら、今年で初めての中忍試験だ。心の準備はできてるな？」

中忍試験当日。
ヤイバは今年初出場となる教え子三人に向かってそう言う。

「バッチリですよ先生！！」

「問題ない」

「むしろワクワクしてるくらいだぜ！！」

やる気は充分な三人に、ヤイバは頷く。

「とりあえず、試験会場に行く前に、俺からお前らに言うことはただ一つ…」

三人を見つめる目付きが真剣になる。

「後悔の残る戦いは絶対するな。勝っても負けても、自分が後悔するような戦いはするな…中忍試験…悔いが残らないよう頑張ってこい！！！」

「「「はい！！」」」

ヤイバの言葉に三人は真剣な顔つきで返事をした。

―中忍試験会場

ザワザワ…

「わぁー人多いね～」

「なぁ、カノン」

「？　どうしたシミズ」

「このウザくて暑苦しい人ゴミ、クナイで刺しまくって良いか？」

「ダメに決まってんだろ！！あと『人ゴミ』じゃなくて『人混み』！！字が違う！！！」

いつものシミズの毒舌にカノンがツッコミをいれる。
ミミはそんな二人のやりとりにクスクス笑う。
その時…

ガツンッ！

っと、誰かが殴られた音が聞こえる。

「何?!」

「おい、あれってリー達じゃないか?」

カノンが指をさした方を見ると、扉の前に知らない男達が立っていて、リーが頬をおさえていた。

「リーの奴、わざと殴られたな」

「あぁ。リーのスピードなら普通に避けれるからな」

「……」

相変わらず扉の前から退いてくれない男達に次はテンテンが説得しにいく。

「お願いですから…そこを通して下さい」

丁寧な口調で男達にお願いするが、一人の男がそんなテンテンを殴ろうとする…が。

パシッ…

「女の子を殴ろうとするなんて最低ですよ」

男の拳をミミが受け止めていた。

「ミミ…」

「やっほー、テンテン」

「このアマ…！！」

「茶々丸、女の子に手をあげる男なんて噛みついちゃえ！！」

「わんわん！！」　ガブッ！

「いてぇ！！」

茶々丸がテンテンを殴ろうとした男の腕に噛みつく。

男が振り払う前に腕から離れ、嫌そうな顔つきをすると、ペッペッ…と唾を出す。

「あら、不味かったのね？可哀想に…」

ミミは茶々丸に口直しのビーフジャーキーを食べさせる。

そんな様子を見て男は怒りで顔を赤くする。

「おいミミ。くだらねーことしてねえでさっさと三階にいくぞ」

「おいおい、何のことだ？三階はここだぞ？」

「いや、その男の言うとおりだ…」

「！！」

シミズの言葉に、後ろから同意する声が聞こえた。
後ろを振り向くと、そこにいたのは…うちはサスケだ…。

「サクラ、どうだ？お前なら気づいているはずだ…」

「え…？」

サスケがピンク色の髪をした少女、サクラにそう言う。

「お前の分析力と幻術のノウハウは……オレ達の班で一番伸びているからな」

「…もちろんとっくに気付いてるわよ。だってここは2階じゃない」

サクラがそう言うと、幻術が解けた…。

「ふ～ん…なかなかやるねぇ。でも…見破っただけじゃあ…ズズッ、ねぇっ！！」

バッ！

扉を通せんぼしていた男が攻撃を仕掛けてくる…だが…。

ザッ
バシ、バシ！

「！！」

その攻撃はリーによって止められた。

「ナイス、リー！！」

「けどあいつ、さっきまで何もしなかったよな？どうして急に…」

リーの行動に疑問をもつカノン。

「フー」

「おい、お前約束が違うじゃないか。下手に注目されて警戒されたくないと言ったのはお前だぞ」

「だって…」

リーはそう言うとある人物に目を向ける。

その人物とは…

サクラだ。

「…リー、あのサクラって子見てるね」

「しかもなんか頬少し赤いな…」

「あのー」

「！」

ミミ達がそう話している間にも、リーはサクラに近づく。

「僕の名前はロック・リー。サクラさんというんですね…ボクとお付き合いしましょう！！死ぬまでアナタを守りますから！！」

そんなことを言い出したリーに、ネジ、テンテン、シミズは呆れた様子で。ミミとカノンは呆然とした様子でリーを見た。

「ぜったい…イヤ…あんた濃ゆい…」

即効でフラれた。

（うわぁ…）

（まぁ、当然の結果か…）

（頑張れ、リー…）

ミミ達は哀れみのこもった目でリーを見た。

「おい、お前…」

ネジがサスケに向かって言う。

「名乗れ」

「人に名を聞く時は、自分から名乗るもんだぜ…」

そんな二人のやりとりに気づいたミミが『あらら…』と思わず声をもらす。

「ネジの奴、早速うちはサスケに目をつけたな」

シミズも二人のやりとりを見てそう答える。

「うちは一族は木の葉の優秀な戦闘部族だからな…」

その時…。

「目つきの悪い君。ちょっと待ってくれ！」

「！」

「げっ！！」

「何だ？」

リーはサスケを見て口を開く。

「今ここで、僕と勝負しませんか」

リーの目は本気だった…。

中忍試験…いきなり嵐の予感だ…。

第6話「中忍試験開幕」（後書き）

原作に突入しました！
ヤイバ先生の台詞が少しありがちかも知れません…。
次回、サスケとリーが対決!!
そしてミミ達がそれを傍観します。

第7話「サスケVSリー」

「あいつ…今ここで勝負する気かよ…」

まだ中忍試験は始まっていないのに、サスケに勝負を挑むリーにため息をつくシミズ。

「ボクの名前はロック・リー。人に名をたずねる時は自分から名乗るもんでしたよね、うちはサスケ君…」

「フン……知ってたのか」

ザッ

「君と闘いたい！」

サスケをまっすぐに見てそう言う。

「あれ？そう言えばネジとテンテンは？」

「先に行ったぞ」

「えぇ！一緒に行こうと思ったのに」

「気づかないお前が悪い…さて…うちはサスケ…お前の実力、しっかり見せてもらうぞ…」

ミミとカノンは会話を終えると、サスケとリーを見た。

「あの天才忍者とうたわれた一族の末裔に…ボクの技がどこまで通用するのか試したい…それに…」

リーはサクラをじ～…と見る。

（かなり本気ね…）

リーはサクラをじ～…と見たあと、パチっとウィンクをする。

「イヤー！！あの下まつ毛がイヤー！！！」

（スゲェ拒否反応だな（汗）いい奴なんだけどなぁ、リーは…）

「確かにあのなりでウィンクはキモいな。軽く殺意わいたぞ」

「そこまで！？」

目を細めて言うシミズの毒舌にカノンは苦笑いするしかなかった。

「髪型もイヤ…眉毛もゲジゲジ…」

「スゴい言われようね…なんかリーが可哀想に思えてきた…」

「オレもだ…」

「いや、まったく感じない。むしろあの罵倒はまだまだ軽いと思うがな…」

と、その時…

「フッ、天使だ君は！！」

チュ！っとサクラに投げキッスをするリー。

「！！！キャー！！」

ザッ！！…ゴン！

リーが飛ばした投げキッスを必死で避け、タンコブができるほど強く頭を打った。

「「あれは流石にキツイ」」

リーの投げキッスを見たミミとカノンは声を揃えてそう言った。

「気持ち悪いもの見せやがって…あいつ後からフルボッコにしてから土下座させてやる…ついでにあのピンク髪の女にも文句言ってやる」

「そこまでしなくても良いだろ（汗）」

「しかもあの女の子とばっちり受けてるし…」

（またまたサスケじゃん！！くっそー！！くっそー！！）

サスケにばかり目をつけられる事にかなり不満を持つ金髪の少年は心の中で文句を言う。

「アンタ変なモン投げんじゃないわよ！なんか命がけでよけちゃったじゃない！！」

「そんなにイヤがらなくても…」

「“うちは”の名を知ってて挑んでくるなんてな。はっきり言って無知な輩だな……お前。この名がどんなもんか……思い知るかゲジマユ」

「是非！」

「待て」

そこで待ったをかけたのは一人蚊帳の外だった金髪の少年だ。

「どうしたんだナルト？」

（ナルト…？）

聞き覚えのある名前にミミは少し考え込む。
そして、思い出したらしく、ポンッと手のひらを叩く

（あぁ…確かキバが言ってた…）

「ゲジマユはオレがやるってばよ！5分もあれば片づく！」

イラついたようにそう言うナルト。

「ふざけてんのかてめーら」

突然、どす黒い感じの声が聞こえる。ナルト達はその声に一瞬ビクリと体を動かす。
その声を発したのはシミズだった。

「な、なんなんだってばよ!!」

「誰？あの人…」

（こいつ…できる…!!）

三人は一斉にシミズを見る。
突然イラついた声を出したシミズにミミとカノン、リーはかなりビックリしている。

「オレはあのゲジマユの同期生だ…うちはサスケ…お前はさっきリーに対して『無知な輩』と言ったな」

「……それがどうした」

「本当に無知な輩なのはお前のほうだ。そこのアホ面の金髪はもちろん、うちはサスケ…お前でもリーは倒せない…」

シミズはナルトとサスケを睨み付けながら言う。

「なんだとーーー!!」

「ナルトはともかく、サスケ君があんな人に負けるわけないじゃない！！」

「女は黙っとけ。ただでさえブスなのに余計醜い顔になるぞ」

「なんですってーー！！？（顔はカッコいいのに性格が最悪だわ！！）」

（シミズ言いすぎ…サクラちゃんだっけ？普通に可愛いと思うけどなぁ…）

「てんめ～！！サクラちゃんになんてこと言うんだってばよ！！」

「シミズ君！！サクラさんに失礼ですよ！！」

「話が続かねぇから黙ってろ…！！」

シミズはナルトとリーをギロリと睨んだ。

「…ナルトならまだしも、オレがこのゲジマユに負けるだと…」

（あのナルトって奴、扱いが酷いな…）

どことなくナルトの扱いの悪さに同情するカノンがいた。

「たとえ才能に恵まれていても、所詮はアカデミーを卒業したばかりのルーキー…リーはこんなナリだが、実力は本物だ。この闘いでお前はまだまだ井の中の蛙だと言うこと思い知る…」

シミズはそう言いきると、『話は終わったからさっさとやれ』っと

目で訴えた。

「くそー！！バカにしやがって！！とにかく、こいつはオレが倒す！！」

ダッ！

ナルトはまっすぐリーに向かっていく。

「はぁ…真正面からくるなんて…そんなんじゃリーには絶対勝てないよ…」

「リー…お前の実力、ルーキー達に見せつけてやれ…！！」

スッ…バシ！

「！！ぐっ」

ダッ、ザッ！

「木ノ葉　烈風！！！」

ドガ！

「うわァ！！」

リーの攻撃が当たり、ナルトはゴロゴロ転がる。

「宣言します。君達はボクに絶対敵いません」

「自分の実力に自惚れてる新人どもには負けねぇよ、リーは…」

「随分とリーの肩を持つねシミズ」

「別に…あぁ言う視野の狭い奴らを見ると腹がたつだけだ…それに、あいつが強いのは本当だからな…」

「フフ…」

シミズの答えに、ミミは穏やかに笑った。

「なぜなら、今ボクは木の葉の下忍で一番強いですからね」

「…あの野郎…フルボッコと土下座の他に木に吊るすのも付け加えてやる…」

（（目が本気だ…！！））

シミズのそんな計画に気づくことなく、リーはサスケを挑発する。

（こいつオレの蹴りを腕で止めやがった……あれは人間技じゃない。どんな忍術を使ったか知らねーが…）

「サスケ君？」

「面白い。やってやる」

「あ！やめてサスケ君！受付の４時までにあと３０分もないのよ…」

「５分で終わる…」

「サスケ君！！」

（無理だな…）

サスケはサクラの制止を無視して、リーに向かっていく。

（来た！！……ごめんなさいガイ先生…禁を破ることになるかもしれません。あの技を使うことになるかも…！）

フッ…

「！！！」

「木ノ葉旋風！！」

リーはサスケに攻撃を仕掛ける。

ザッ

サスケはリーの攻撃をガードするが、リーの攻撃がガードをすり抜け見事に命中する。

（多分あいつはリーの技が高速の体術と気づいてないな…）

「サスケ君！！！」

（ど…どういうことだ……？）

（今…確かにガードしたハズなのに…）

（ガードをすり抜けやがった…！何だ…忍術か…それとも幻術…！？）

「まだ体術って気づいてないんだよね？サスケ達」

「あぁ…」

ボソリと小さな声で話すミミとカノン。
その時、サスケの様子に変化が起こった。

「！　あれは…うちは一族の血継限界…写輪眼！！」

（アレが写輪眼ですか…）

（アハ…やっぱり凄いサスケ君って！これがカカシ先生のと同じ血継限界なら…これでゲジマユの術を見抜ける！！）

「甘いな…」

「リーのは、幻術でも忍術でもないからね…」

リーは体制を低くすると、サスケを思いきり蹴りあげた。

（写輪眼で見切れねーなんて…まさか…こいつの技は…！）

「そう…ボクの技は忍術でも幻術でもない」

「ん…？」

リーの技をくらい、気絶していたナルトが目を覚ました。

「！サ、サスケェ！！」

「！！くっ、影舞葉…！！」

「そう！ボクの技は単なる体術ですよ……サスケ君。にわかには信じられないかもしれませんが…」

「うわぁ…凄い闘いだなぁ…」

「てかオレらはさっさと受付に行かなくて良いのか？」

「写輪眼には幻・体・忍術の全てを見通す能力があるといわれています。確かに、印を結びチャクラを練るという法則性が必要な忍術や幻術は見破って確実に対処できるでしょう。しかし体術だけはちょっと違うんですよ…」

「ど…どういうことだ！？」

「分からないのか？」

そこに口をはさんできたのはシミズだ。

「写輪眼で動きを見切っても、体術はお前自身が反応できる範囲のものでなければ体が動かないんだ…リーのスピードは、今のお前の身体能力じゃついていけないんだよ…」

シミズの説明が終わったのと同時に、リーは自分の腕に巻いてある包帯を少し外す。

「知っていますか?強い奴には天才型と努力型がいます。君の写輪眼がうちはの血を引く天才型なら…ボクはただひたすらに体術だけを極めた努力型です」

「リー…」

リーの凄まじい努力を今いるメンバーの中で一番知っているカノンはリーの言葉を真剣に聞いていた。

「言ってみれば君の写輪眼とボクの究極の体術は最悪の相性…そしてこの技で証明しましょう」

(…あいつが今からする技…あまり良い予感がしないな…)

(リーの奴…なんか無茶なことしようとしてるんじゃないだろうな…)

リーの言い方に違和感を感じるシミズとカノンをよそに、リーはサスケに技を繰り出そうとする。

「努力が天才を上回ることを」

(何をする気だ…!?)

「ついに決着が…!?」

「そこまでだリー」

すると、リーの動きがいきなり止まった…いや、止められた。

（……サスケがやられた!?オレが気絶してる間に何があったんだってばよ……）

「大丈夫!?サスケ君!!」

「おい…あの亀って…」

「うん、間違いない。ガイ先生の口寄せ獣だ!!」

「……」（嫌そうな顔）

「み…見てらしたんですか…」

「リー!今の技は禁じ手であろうが!」

「す…すみません。つい…」

リーは闘いを止めた亀に怒られていた。

「し…しかし、もちろんボクは“裏”の技の方を使う気はこれっぽっちも…」

（裏の技だと…?）

シミズはリー達の会話を聞いて眉をしかめた。

（内容を聞いてる限りじゃ、相当ヤバい技みたいだな…下手すれば命に関わる…とか、そんな類いか？）

「覚悟ができたであろうな？」

「オ…オッス…ではガイ先生お願いします！」

「来るぞ…」

「初めて会う彼らの驚く反応が目に浮かぶよ…」

ボン！！

「まったく！青春してるなー！お前らーっ！！！」

キラーン！

「！」

「！！」

「うっ…うっげえええええーっ！！！もっと濃ゆいのが出て来たってばよー！！」

「ぷっ…アハハ！！三人とも良い反応！！特にナルト！！！」

「相変わらず濃ゆい…」

「…うざっ…」

三人は激濃ゆだの、激おかっぱだの、激眉だの好きがってなことを言っていた。
その後、ガイはリーを殴り、涙を流した後、ガシッと抱き合った。
端から見れば非常に暑苦しい光景だった…。

「いいんだ、リー！若さには間違いってのはつきものなんだ……」

「優しすぎます…先生っ！！」

「だがケンカをしたあげく禁を破ろうとした罰はーたてまえ上、中忍試験後にでも受けてもらうぞ」

「ハイッ！！」

「演習場の周り５００周だ！！」

「押忍！！」

もう勝手にやっとけ…という雰囲気だ。
その時、ガイがこちらを見てきた。

「それよりカカシ先生は元気かい？君達！」

「カカシを知ってんのか……？」

「知ってるも何も……クク……」

「？」

少し笑うと、ガイは一瞬で視界から姿を消した。

「人は僕らのことを『永遠のライバル』と呼ぶよ…」

「「「！！！」」」

視界から消えたガイは、ナルト達の背後に回り込んでいた。

「５０勝４９敗」

「いつの間に…！！」

「カカシより強いよ、オレは…」

（そ…そんな…速い！！スピードならカカシ以上だ！！……人間か…！？）

「どうです！！ガイ先生はスゴイでしょう！！」

（確かにスゴイよね、ガイ先生って）

（あの見た目でな…）

（早くどっか行ってくれねぇかな…）

「今回はリーが迷惑をかけたが、オレの顔に免じて許してくれ。このさわやか顔に免じて…」

（（すいません、どの辺りが…？））

「あんたのどの辺がさわやかなんだよ。冗談はあんたの存在だけにしてくれ。てか暑苦しいからさっさと帰れや」

（（シミズーーー！！！））

（先生に向かってあの容赦ない毒舌…）

（あいつ…やはりできるやつだ…）

（なんだってばよあいつ…サスケよりもムカつくってばよ…）

シミズの容赦ない毒舌にミミとカノンは心の中で叫び、ナルト達はナルト達で、そんなシミズをそれぞれの思いで見ていた。

「サスケ君…最後に一言言っておきます。実のところボクは自分の能力を確かめるためにここへ出てきました」

ギュ

「さっきボクはウソを言いました。おそらく木の葉の下忍で最も強い男はボクのチームにいる。そいつを倒すために出場するんです…そして君も…ターゲットの一人」

ザッ

「試験！覚悟しといて下さい！！」

リーはその場から去った後、サスケは拳を強く握った。

「サスケ君…」

「けっ…なーんだ！うちは一族もたいしたことねーんじゃねーの？」

「ナルト！！」

「くっ…うるせー…次はあいつをのしてやる…」

「フン、ボロ負けしたくせによ」

「ちょ…何よ！ナルトアンタ…！」

「お前も見ただろ。あいつの手……」

「「「！！」」」

「あのゲジマユはすっげー特訓したんだろ。毎日毎日…お前よりもな…そんだけのことだってばよ」

ナルトの意外な言葉に、ミミ達は驚いた顔をする。

（こいつ…）

（ただ猿みたいに騒いで悔しがるだけかと思ったが…）

（へぇ～、良いこと言うね…これは少し期待しても良いかも知れないね…ナルトか…）

三人の中のナルトの印象が変わった瞬間だった…。

この先の中忍試験…どんな忍達と出会うのか…中忍試験開始まであと少し…。

第7話「サスケVSリー」（後書き）

なんだかシミズがでしゃばりすぎた気がします…。
意外と書きやすいんですよ、シミズって！
次回、ルーキー達全員集合!!
いろんなキャラと絡ませていきたいです!!

第8話「ルーキー9」

リーとの戦闘を終え、試験会場の教室へ向かおうとするナルト達をミミは呼び止める。

「君達！さっきは同期のリーが迷惑かけたね」

「あ？誰だってばアンタ…？」

「おおかたそいつ（シミズ）のチームメイトか」

（あれ？あの頬のペイント…どっかで…）

「ごめんごめん、紹介がまだだったね。さっき毒舌をはいてたのが水鳥シミズで、隣にいるのが火堺カノン。そして私は犬塚ミミで、この子は忍犬の茶々丸。君達の先輩忍者だから、これからよろしくね！！」

「「「犬塚！！？」」」

ミミの名字を聞いた三人は驚く。

そんな三人にミミは首を傾げる。

「もしかして…キバの姉ちゃんかアンタ?!」

「思い出したわ!そのフェイスペイント…キバにもついてたわ!!」

『キバ』という言葉を聞くやいなや、ミミは目を輝かせる。

「そう!私はキバの姉だよ!!まぁ時間もないし、キバの話は後から聞いてもらうことにして…一緒に試験会場に行きましょう」

そうしてミミ達は試験会場の教室へと向かった…。
その後、教室の前にいたカカシとナルト達が話をする。
なんでも、サクラに自分の意志で試験を受けさせようとウソをついていたらしく、ナルトとサスケだけがここに来れば、受験を中止にするつもりだったらしい。

「さすが、ヤイバ先生の先輩だね!」

ナルト達と話を終えたカカシがこちらにやってくる。

「君達は確か、ヤイバの部下だったよね?」

「はい。カカシ先生の話は、ヤイバ先生やガイ先生から聞いています…良いチームですね、貴方のところのチームは…」

カノンが礼儀正しく言う。

「あいつらは個性的だが、オレの自慢のチームだ…君達は先輩忍者として、あいつらと仲良くしてくれると助かるな」

「…気分次第ですね…」

シミズは素っ気なくそう答える。
ミミとカノンはシミズの素っ気ない態度に苦笑いした…。

「まっ、頑張ってきなさい」

そう言うとカカシはその場から姿を消した。
そしてとうとう彼らは試験会場へと足を踏み入れる。

ギィ…

「す…すげー」

「……」

「な…何よ…これ…」

扉を開けると、たくさんの忍達がいた。
かなりの数の鋭い視線がナルト達に向けられた。
と、その時…。

ガバッ

「サスケ君おっそーい♡」

「！！」

「私ったら久々にサスケ君に逢えるとおもってぇ～ワクワクして待ってたんだからー♡」

突然サスケに飛び付いてきたポニーテールの少女。
どうやらナルト達の同期の忍らしい。

「サスケ君から離れーっ!!いのぶた!!」

「あ～らサクラじゃな～い。相変わらずのデコり具合ね、ブサイクー♡」

「なんですってー!!」

「べ～」

見たところこの二人は恋のライバルのようだ。

「またうるさそうな女が…どこかぶりっ子してるところが腹立つな」

「そう言わないの。あれは少しでも好きな人に可愛く見られたいって言うアピールなんだから…」

ミミとシミズがそんな会話をしていると…。

「なんだよ、こんなめんどくせー試験お前らも受けんのかよ!」

『めんどくせー』と言う言葉にミミはまさかと思い、その人物に目を向ける。

「なんだぁオバカトｒ「シカマル!!」ちょっ…!!」

ナルトの言葉を渡り、シカマルの登場に心底嬉しそうな表情をして声をあげるミミ。

「やっぱお前も参加してたか、ミミ…」

「シカマル、知り合い？」

シカマルの隣にいたポテチを食べている少年が問う。

「あぁ…こいつは犬塚ミミ。一期上の先輩でキバの姉だ…」

「「キバの姉？！」」

少年はもちろん、サクラとサスケを取り合っていた少女も驚いた声をあげた。

「そうだよ。それから…後ろの二人にはシカマルもまだ会ってなかったよね」

「あぁ、そうだな。ミミのチームメイトとは今日初めて会った」

「自己紹介しなきゃいけないな…オレは火堺カノンだ」

「…水鳥シミズ」

「まさかキバのお姉さんがいたなんて…ボクは秋道チョウジ。よろしくね」

「私は山中いの。よろしくお願いします（ヤダ、水色の髪の彼、カッコいいじゃない…！！）」

シカマルとの再会に笑顔になるミミ。

「へぇ～あいつがシカマルね…あーいうタイプが好きだったんだなミミは…」

「！！ちょっ…シミズ！！／／／聞こえたらどうしてくれるのよ！！／／／」

幸い、シミズの言葉はシカマル達には聞こえていなかった…。

（へぇ～ミミさんって、シカマルのことが好きだったんだ～）

…山中いのを除いては…。

「ひゃっほ～みーっけ！」

「「！」」

「こ…こんにちは……」

「これはこれは皆さんおそろいでェ！！」

いきなり別の場所から声がかかってくる。

（！！この声…間違いない！！）

「何だとお前らもかよ！…ったく」

「く～なるほどねー。今年の新人下忍9名、全員受験ってわけか！さて、どこまでいけますかねェオレ達。ねェサスケ君」

（やっぱり…！！！）

「フン…オレ達は相当修行したからな…お前らにゃ負けｎ「キバーーーー！！！」うわぁ！？」

キバが台詞を言い終わる前に、ミミがいきおい良くキバに抱きつく。
まさか弟の班も受験してるとは思ってもいなかったので、ミミにとって嬉しいほかなかった。

「ちょっ…ミミ姉ちゃん！！いきなり抱きつくなよ、ビックリしたじゃねーか」

「ごめんね！でもキバの班も受験するとは思わなかったから…嬉しくて嬉しくて！！」

そう言って抱きつく力を少し強め、頬づりまでするミミ。

「あ…あのさ、嬉しいのは分かったんだけど…みんなこっち見てるから…そろそろ離れてほしいんだけど…／／／」

ミミの行動にルーキー達は呆気にとられ、シミズとカノン、シカマルには呆れられる。

（あのキバがおとなしくなってる…！！）

キバと同期のメンバーは、そう思っていた。
充分にキバを抱きしめたミミは、キバの後ろにいるキバのチームメイトに近づく。

「君達がキバのチームメイトだね。キバから話は聞いているよ　。

私は犬塚ミミでこっちが茶々丸、見ての通りキバの姉だよ。よろしくね」

「あ、はい…私は…日向ヒナタです…よろしくお願いします…」

「油女シノだ…よろしく…」

「よろしくね！で、こっちが私のチームメイトの…」

「水鳥シミズだ」

「……」

「？カノン？」

「！…悪い…オレは火堺カノン。よろしくな」

ミミ達はこれでルーキーとは全員と対面した。

「……」

カノンは先程からある人物に目を向けていた。

（ヒナタ…）

その人物とは…ヒナタだ。

ヒナタを見つめるカノンに気づいたのはシミズただ一人…。

「いやぁさっきはびっくりしたね」

ミミはシミズとカノンに言う。
実は先程、眼鏡をかけた青年、薬師カブトという男が、音符のマークがついた忍の攻撃をくらった。
その忍達は、最近できた音隠れの里からきたらしい。

「しかし、どうも腑に落ちないな…」

「何が？音の忍の攻撃方法か？」

「いや…まぁ、お前らが気にすることねーよ」

「そうか…」

（音の攻撃方法はなんとなく予想はついたが…あの薬師カブト…どーも胡散臭いな…）

シミズが一人、考えていると…。

「静かにしやがれどぐされヤローどもが！！」

ボン！

「な…なんだ？」

男の怒声が聞こえたと思ったら、突然煙がたち、かなりの数の忍が

現れた。

「待たせたな…『中忍選抜第一の試験』試験官の森乃イビキだ…」

「わぁ…いかつい顔…」

ミミは思わずボソリと囁いた。

「試験官の許可なく対戦や争いはありえない。また、許可が出たとしても相手を死に至らしめるような行為は許されん。オレ様に逆らうようなブタ共は即失格だ。分かったな」

「ククク…オレ様主義ってやつか?嫌いじゃねえぜ?オレがやる立場ならな…」

「「……」」

なんとなく身の危険を感じるミミとカノン。

「ではこれから中忍選抜第一の試験を始める…志願書を順に提出して代わりにこの…座席番号の札を受け取り、その指定通りの席に着け!その後、筆記試験の用紙を配る…」

筆記試験と聞いた途端、シミズはミミとカノンをジト目で見る。

「心配しないで!もしもの時の秘策もあるから!!」

「オレはシミズみたいに頭は良いわけじゃないが、悪いわけでもない…なんとか解いてみせるさ」

「そうか…」

ミミ達の後ろで叫んでいる人物がいるが、完全無視だ。
中忍選抜第一の試験が始まろうとしていた…。

第8話「ルーキー9」（後書き）

ルーキー全員集合!!
なるべくシカマルと絡ませたいですね…。
次回、第一の試験!!

第９話「第一の試験開始」

「試験用紙はまだ裏のままだ。そして、俺の言うことをよく聞くんだ」

中忍試験官、森乃イビキはそう言って、チョークを手にする。

これから中忍選抜の第一試験が始まるのだ。

「この第一の試験には、大切なルールってもんがいくつかある。黒板に書いて説明してやるが、質問は一切受け付けんからそのつもりでよーく聞いとけ」

多少意味深な言葉を言うイビキにミミ達は首をかしげる。

「第一のルールだ！まず、最初にお前らには最初から各自１０点ずつ持ち点が与えられている。筆記試験問題は全部で１０問、各１点。そして…この試験は減点式になっている」

（なんでわざわざ減点式なんだ…）

シミズは眉をひそめてそう思う。

「つまり、問題を１０問正解すれば持ち点は１０のまま。しかし、

問題で3問間違えれば、3点引かれ、7点になるわけだ」

「第二のルール…この試験はチーム戦。つまりは受験申し込みを受けたチームの合計点数で合否を判断する…つまり、持ち点の合計点をどれだけ減らさずに、試験をおわれるをチーム単位で競ってもらう」

途端、ミミとカノンの背中がゾクリとした。
シミズの鋭い視線が、二人を交互に見ていた。
ちなみに、ミミ達がどこに座っているのかと言うと、ミミはシカマルの隣、シミズはミミと少し離れた所、カノンはシミズの隣だ。

「ちょ、ちょっと待って！持ち点減点式の意味が分かんないけど、チームの合計点ってどういうこと！？」

サクラがイビキに疑問を投げ掛ける。

「うるせえ！お前らに質問する権利はないんだよ！これにはちゃんと理由がある。黙って聞いてろ！分かったら肝心のルールだ」

（理由…ってなんだ？）

「第三に、試験途中の妙な行為…つまり、“カンニング及びそれに準ずる行為を行った”とここにいる監視員達に見なされた者はその行為1回につき持ち点から2点ずつ減点させてもらう。

試験途中に退場してもらう者も現れるだろう」

（…まるでカンニングがあると確信してるような口ぶりだな…）

（大丈夫かな私…）

「不様なカンニングなど行った者は、自滅していくと心得てもらおう。仮にも中忍を目指す者。

―忍なら立派な忍らしくすることだ」

（…なるほどな…）

イビキの言葉にシミズはこの試験の本当の意味を理解した。

「そして、最後のルールだ。この試験終了時までに持ち点を全て失った者…および正解数0だった者の所属する班は…班員全員を不合格とする!!」

この言葉に会場の下忍全員に緊張がはしる。

「試験は一時間だ。よし…始めろ!」

イビキの合図に、筆記試験がスタートした。

（……なんだよこれ…下忍の俺らが分かるような問題じゃない…）

カノンは自分の答案用紙に書かれている暗号文などを見て、ため息

をつく。

（忍なら立派な忍らしくすること…この試験の糸はなんとなく分かったが…情報収集系の忍術が使えないからやりようがないな…どうしよう…シミズに殺される…）

自分の無残な状況を思わず想像してしまい、カノンは額を押さえる。

…コロッ…

（！？…これは…）

カノンの答案用紙に転がって来たのは、シミズの右耳につけている黒のピアス。

（シミズ…）

カノンは目だけをシミズに向ける。
当の本人は黙々と答案用紙に答えを書いている。

（そうか…このピアスがあれば…）

カノンはピアスを利き手じゃない方で握る。

『…カノン、聞こえるか？』

ピアスを握った途端、頭の中でシミズの声が聞こえる。

…実は、シミズのつけているピアスは頭の中で交信ができる電波を放っている。

二つのピアスの内の一つを相手が所持することでテレパシーが可能になる便利なものだ。

『あぁ、声が少し小さく聞こえるが問題はない』

ただし、元々耳につける物なので、ピアス穴を開けていない者には、少し聞き取りにくくなることと、1日4時間までしか使えないことが難点だ。

『今から問題の答えを言うからしっかり書けよ』

『もちろんだ』

カノンは鉛筆を持ち、シミズが言う答えを書いていった。

―その頃、ミミの方は…。

「…ワン、ワン」

「なるほど…」

ミミは茶々丸の小さな鳴き声を聞き、答案用紙に答えを書いていく。ちらり…と目だけを隣のシカマルの方へ向ける。

(隣がシカマルで助かった～。茶々丸に答えを見てもらいやすいし、シカマルの頭の良さならこの難しい問題を解けること間違いなしだから安心だわ)

視線を答案用紙に再び戻すと答えを書く。

茶々丸やミミの視線に気づいていたシカマルは、ハァ…とため息を

つく。

（ミミの奴…完全に俺の答えをカンニングしてやがる…たくっ、筆記試験なんてめんどくせー…）

心の中でそう言いながらも、答案用紙に答えを書く手を止めなかった…。

「よし！これから第１０問目を出題する……とその前に一つ、最終問題についてのちょっとしたルールの追加をさせてもらう」

（ルールの追加！？）

「では、説明しよう。これは絶望的なルールだ。

まず、お前らにはこの第１０問目の試験を…“受けるか”“受けない”かのどちらかを選んでもらう！」

「え…選ぶって！もし１０問目の問題を受けなかったらどうなるの！？」

「“受けない”を選べば、その時点でその者の持ち点は０になる…つまり、失格！もちろん、同じ班の者もだ」

「そんなの“受ける”を選ぶに決まってるじゃない！」

今の内容を聞いた限りでは確かにそうだ。

だが、次のイビキの言葉に絶句することになる…。

「―そして、もう1つのルール。

“受ける”を選び正解できなかった場合、その者については今後永久に中忍試験の受験資格を剥奪する！」

「「「「「！？」」」」」

「そ…そんなバカな理由があるか！現にここには、中忍試験を何度か受験している奴だっているはずだ！」

弟、キバの言葉にうんうんと頷くミミ。

「ククク…運が悪いんだよ。今年はこの俺がルールだ。その代わり、引き返す道も与えてるじゃねーか。自信のない奴は大人しく“受けない”を選んで…来年も再来年も受験したらいい」

「…ねぇ、シカマル。シカマルはどうするの？」

ミミはボソボソと小さな声でシカマルに問う。

「…ぶっちゃけめんどくせーから帰れるなら帰りてーけど…それじゃあ試験官の思う壺だ…まぁ、一応受けるつもりだ…（この試験の裏に気づいちまったしな…）」

「そっか…じゃあ、シカマルが受けるって言ってるし、私も受けよ

ーっと」

「…俺が受けなくても受けてたくせによく言うぜ…」

「あ、バレた？（半分本気だったけどね…）」

ミミがシカマルとこんな会話をしている頃、シミズとカノンも頭の中で会話をしていた。

『…ただの試験官が受験資格を永久剥奪なんてできるはずがない…奴は俺たちを試している…』

『じゃあ、手を挙げないのが得策か…』

「では、始めよう。この第１０問目…“受けない”者は手を挙げろ。番号確認後、ここから出てもらう」

このことに怖じ気ついた者達が手を挙げ、１チーム、また１チームと、受ける者が少なくなっていく。

（腰抜けどもめ…）

シミズが出ていく忍達に悪態をはいていると…。

バアン！！

ナルトが机を思いきり叩いた。

「なめんじゃねー！！オレは逃げねーぞ　！！受けてやる！もし、一生下忍になったって…意地でも火影になってやるから別にいいっ

てばよ！怖くねーぞ！！」

「…もう一度訊く…人生を賭けた選択だ。やめるなら今だぞ」

「まっすぐ自分の言葉は曲げねぇ…オレの忍道だ！！」

ナルトは迷いのないまっすぐな目をして言い放つ。

（ナルト…）

（…今の言葉で、他の奴らも受ける気になっている…）

（凄いな、あいつ…）

「いい決意だ。では、ここに残った全員に…

“第一の試験”合格を言い渡す！！」

ヤイバ班、第一の試験…クリア…。

第9話「第一の試験開始」（後書き）

ヤイバ班で、シミズがダントツに頭良い設定です。
さすがにシカマルには敵わないけれど…。
次回、第二の試験！！

第１０話「第二の試験開始」

…森乃イビキは確かに、残った者全員に『合格』を言った。
その言葉に周りがざわついた。

「ちょ…ちょっとどういうことですか!?いきなり合格なんて!１０問目の問題は!?」

「そんなものは初めから無いよ…言ってみればさっきの２択が１０問目だな」

「え!!?」

「ちょっと…!じゃあ今までの前９問は何だったんだ…!?まるで無駄じゃない!」

「あ!テマリさんだ!!」

「なんだミミ。あの砂忍の女と知り合いか?」

「うん!!もう友達だよ!!」

お～いっと、テマリに手を振るミミ。
テマリは一瞬、ミミと目が合うが、すぐにそらされてしまった。

「……あれ……？」

（無視されてんじゃねーか…）

シカマルは多少哀れみのこもった目でミミを見た。

「……無駄じゃないぞ。９問目までの問題はもうすでにその目的を遂げていたんだからな…君達個人個人の情報収集能力を試すという、目的をな！」

「？……情報収集能力？」

この後、イビキからこの試験の意味というものを聞かされる。
イビキの額に刻まれた痛々しい傷痕も見た…。

（酷い…）

（これが忍の世界…か…）

「“受ける”を選んだ君達は一難解な“第１０問”の正解者だと言っていい！これから出会うであろう困難にも立ち向かっていけるだろう…入口は突破した…『中忍選抜第一の試験』は終了だ。君達の健闘を祈る！」

第一の試験を無事に突破し、ミミとカノンはほっと、一息つく。
だが、その時…。

バリン！

突如、窓ガラスが割れ、そこから人が飛び出してきた。

「アンタ達、よろこんでる場合じゃないわよ！！！私は第二試験官！みたらしアンコ！！次行くわよ次ィ！！！ついてらっしゃい！！！」

突然、新たな試験官登場にア然としている…。

「…空気を読め」

（まったくだな）

（あの人、勢いがナルトに似ているな…）

（美味しそうな名前だな～）

若干変なことを考えている人物がいるとは露知らず、アンコは試験会場を見渡す。

「９０人…！？イビキ！３０チームも残したの！？今回の第一の試験…甘かったのね！」

「今回は…優秀そうなのが多くてな」

「フン！まあ、いいわ……次の『第二の試験』で半分以下にしてやるわよ！！ああ～ゾクゾクするわ！詳しい説明は場所を移してやるからついていらっしゃい！！」

「ここが『第二の試験』会場第４４演習場…別名…『死の森』よ！！」

アンコに連れて来られた場所は、薄気味の悪い森の前だった。
あまりの薄気味の悪さに、ミミは背筋をゾクリとさせた。

「フフ…ここが“死の森”と呼ばれる所以外、すぐ実感することになるわ」

「『死の森と呼ばれる所以、すぐに実感することになるわ』なーんておどしても、ぜんっぜんへーき！怖くないってばよ！」

「またあのバカ野郎は…」

「そう…君は元気がいいのね」

その時…

シュバ、シュ！

アンコは、ナルトの頬をクナイで傷つける。

「アンタみたいな子が真っ先に死ぬのよねぇ。フフフ…私の好きな赤い血をぶちまいてね」

（怖！！あの人怖！！！）

ナルトの頬から流れる血を舐めるアンコに恐怖するミミ。

「クナイ…お返ししますわ…」

「わざわざありがと」

突然、アンコの背後から舌の長い人物が現れ、クナイをアンコに返した。

「でもね…殺気を込めて……私の後ろに立たないで。早死にしたくなければね…」

「いえね…赤い血を見るとついウズいちゃう性質でして…それに私の大切な髪を切られたんで興奮しちゃって…」

「どうやら今回は血の気の多い奴が集まったみたいね…フフ…楽しみだわ…」

（アンコさんも充分血の気が多い気が…）

「アンタも人のこと言えねーよ、自分自身のことも理解できないのか？頭開いて脳みその小ささを確認したいもんですね」

「「シミズーーー！！！」」

またしてもシミズの毒舌に頭を抱えるミミとカノン…。
だが、言われている本人はシミズの言葉に耳をかさず、紙をみんなに配り始める。

「同意書よ。これにサインをしてもらうわ」

「…何だ？」

「…こっから先は死人も出るから、それについて同意をとっとかないとね！私の責任になっちゃうからさ～」

（し、死人！！？とんでもないこと言い出しやがったぞあの試験官！？）

（…キバやシカマルのチーム…大丈夫かな…）

アンコの言葉を聞いて、キバやシカマル達のことが急激に心配になったミミであった…。

「まず第二の試験の説明をするから、その説明後にこれにサインして班ごとに後ろの小屋に提出してね。じゃ、第二の試験の説明を始めるわ。早い話ここでは極限のサバイバルに挑んでもらうわ」

（サバイバルかよ。またクソめんどくせー試験だな！）

「……」

「どうしたシミズ？」

同意書を見つめるシミズに気づいたカノンが声をかける。

「いや…この同意書は必要ないと思ってな…俺は絶対死なねーし、お前らもみすみす殺させはしねーしな…」

「シミズ…」

普段は毒舌ドSなシミズだが、意外と仲間思いだ。
ミミはそんなシミズの言葉に嬉しそうな表情をする。

「……」

「なーによシカマル。ミミさん達の方を見て…さてはアンタ、シミズさんに嫉妬してるわね～？」

ミミ達とのやりとりを見ていることに気づいたいのがニヤニヤしながらそう言う。

「あ？何言ってんだ？」

「またまた～。ミミさんがシミズさんにあんな嬉しそうな表情を見せることに不満を感じたんでしょ？」

「なんで俺がそんなこと思わにゃなんねーんだよ、めんどくせぇ…」

（…自覚なしってところかしら…）

そんなやりとりがあった後、試験の説明内容を聞かされた。
ルールは、４４個ある各ゲートから一斉に演習場に入り、演習場内

で二種類ある巻物の争奪戦を行う。なお、各チームに最初の時点でどちらかの巻物が渡されている。

合格条件は、５日間以内に二種類の巻物を持って中央にある塔まで３人でたどり着くこと。

失格条件は３つ。

・時間内に二種類の巻物を塔まで３人で持って行けなかったチーム。
・班員を失ったチーム、又は再起不能者を出したチーム。
・巻物の中身は塔の中にたどり着くまで決して見てはいけない。

…以上が、この第二の試験のルールだ。

「最後にアドバイスを一言……死ぬな！」

アンコがそう言うと、緊迫した空気が流れた。
そして下忍達は、同意書と引き換えに巻物を受け取った。

「皆、担当の者についてそれぞれのゲートへ移動！これより３０分後に一斉スタートする！！」

「３０分後って、思ったより長いね」

「時間が経つまでどうする？」

「毒舌３０分耐久がやりたい」

「「却下。てかなにそれ」」

そうこうしている内に、３０分はあっというまに過ぎていった…。

「これより中忍選抜第二の試験！開始！！」

アンコがそう言ったと同時に、下忍達は死の森へと足を踏み入れたのだ…。

「うわぁ…やっぱり薄気味悪いなぁ…」

「げっ…あれ、毒蛇じゃないか…？」

「よし、カノン。噛まれてこい」

「なんで！？」

「噛まれて不様に苦しむカノンが見たいから」

「ふざけんな！！てかさっき、『お前らもみすみす殺させはしねーし』…とか言ってたよな！？」

「あきらかに守る気がないよねそれ…」

ヤイバ班はシミズのとんでもない発言を聞きながら死の森を走り抜けるのだった。

果たして第二の試験、巻物争奪戦を、ミミ達は勝ち残ることができるのでしょうか…

第１０話「第二の試験開始」（後書き）

なんか中途半端な所で終わった気がする…。
次回、ミミがシミズ達と別行動。
ミミの見た光景とは…！？

第１１話「木の葉ＶＳ音」

「だいたいこれくらいで良いかな…」

シミズとカノンと別れ、それぞれ食料集めをしながら塔の近くまで行くことになった。
今ミミは、茶々丸とともに食料集めをしている。

「さて、食料集めも終わったし、先に進むよ茶々丸！」

「ワン！！」

そう言うと、ミミは茶々丸とともに塔の方角を目指した。
茶々丸の頭を優しくなでながら歩いていく。

（キバとシカマルは大丈夫かな…）

ミミの頭に浮かぶのは、愛しの弟と想い人。
彼等は自分達と違い、まだ下忍になったばかり…ミミの不安は大きくなる一方である…。
ミミの考えを察したのか、茶々丸はミミを安心させるように足元にすりより、「ワンワン！！」と元気良く鳴いた。

自分を慰めようとする茶々丸を見て、ミミは笑顔になる。

「そうだね…私が心配したって何も変わらない…大丈夫、キバは私と同じでサバイバルが得意だし、シカマルも頭良いから、きっとこの厳しい試験を乗り越えられるよね…！」

「ワウン！！」

いつも通り元気になったミミを見て、茶々丸は尻尾を振って喜んだ。

「さて、早いとこ塔の方に…！！」

クンクン…

「……この匂いは…茶々丸！！」

「ワン！ワン！」

ミミは茶々丸と共に、自身が感じとった匂いの元へと駆け出した。

（…やっぱり…シカマル達だ…）

前方にシカマル達を発見し、気配を消し距離をとる。

（いったい何を見て…！！）

シカマル達が見ている方角を見ると、ナルトとサスケ、リーが倒れていて、サクラは音忍の女に髪を掴まれていた。

（サクラちゃん！？てか、なんでリーが倒れてるの…！？）

シカマル達の後ろからその状況を見たミミは混乱していた。

（と、とりあえず…助けた方が良いよね…けど、一人で突っ込むのは危険だよね…）

ミミが心の中で葛藤していると…

―ザン！

サクラは、クナイで自分の髪を戸惑いなく切る。
そうすることで、音忍の女の手から抜け出す。
サクラは倒れているリー達の前に立つ。
その背中は、どこか心強いようにミミの目には写った…。

「このガキィ！」

音忍の男がサクラに攻撃を仕掛けようとするが…

ザッ！

（！いのちゃん…）

いのがサクラの前に立つ。
いのに続き、シカマルがチョウジを連れて、サクラの前に立つ。

「ふ…二人とも、何考えてんだよォ～～！コイツらヤバすぎるって！食われるって！シカマル…、マフラーはなしてよォ～！」

チョウジは泣きながらそう言うが、シカマルはマフラーを放さない。

「放すか、バカ！めんどくせーけど、しょーがねーだろ！いのが出ていくのに、男のオレらが逃げられるか！」

（シカマル…）

シカマルの言葉に、ミミは不謹慎だと思いながらも、思わずクスリと笑った。

「巻き込んじゃってゴメンねー！だけど、どーせチーム同士…運命共同体じゃなーい！」

「ま、なるよーになるさ」

「クク…。お前は抜けたっていいんだぜ。おデブちゃん」

音忍の言葉に、チョウジはピクリと反応する。

「え？いま、何て言ったの、あの人…。ボク…、あまり聞き取れなかったよ…」

チョウジの様子にミミは首を傾げる。

「嫌ならひっこんでろっつったんだよ、このデブ！！」

「ボクはデブじゃない！！ポッチャリ系だ！コラーーー！！！」

突然怒りだしたチョウジにギョッとするミミ。

「うオオオオ！！ポッチャリ系、バンザーイ！！」

（チョウジに『デブ』は禁句みたいね…性格変わってるし…）

「よーーしィ！お前ら、分かってるよな！これは木の葉と音の戦争だぜぇ！！」

「ったく、めんどくせーことになりそうだぜ」

そう言うとシカマルは、チョウジのマフラーを放した。

「サクラ…」

「！！」

「後ろの二人…、頼んだわよ。」

「うん…！」

「それじゃ、いのチーム、全力で行くわよー！」

「「おう！！」」

（…少し様子見しておこうかな……頑張って、シカマル…）

ミミは、シカマル達の戦いを見守ることにした。

「フォーメーション、猪鹿ちょーーう！チョウジ、頼んだわよー！」

「オーケー！！（倍化の術！！）」

チョウジは印を結び、ボン！っと体をボールのように大きくする。

（続いて、木の葉流体術・肉弾戦車！！）

顔と手足を体の中に入れ、ゴロゴロと回転していった。

「！なんだ、このヘンテコな術は…。フン！！デブが転がってるだけじゃねーか」

（あのチョウジの技…かなり威力あるな…当たったら人溜まりもないかも…）

チョウジの技を見てそう思うミミ。

音忍はチョウジに向かって術をかける。

しかし、激しく回っているチョウジはノーダメージ。

急停止すると、飛び上がった。

「！！何ィ！？跳ねやがった」

包帯を巻いたもう一人の音忍が助けに向かおうとする。

（よし！忍法・影真似の術！！）

シカマルの影が包帯男の影を捕らえる。
チョウジは男に直撃するが、避けられた。

「いの！あとはあの女だけだ」

「うん！シカマル、私の体もお願いねー！」

いのは印を組む。

（忍法・心転身の術！！）

突然、いのがふらっと倒れこむ。
倒れかけてたいのの体を、シカマルが支える。

（シカマルに支えられてる…羨まし…て違う！！いのちゃん、いったいどうなって…）

「これでおしまいよ！」

音忍の女からいのの声がした。
ミミはそのことにビックリするが、それよりも、シカマル達のコンビネーションに目を輝かせる。

（これがフォーメーション、猪鹿蝶…コンビネーション抜群じゃん…！！）

「アンタたち！一歩でも動いたら、このキンって子の命はないわよー！アンタたちのチャクラの気配が消え次第、この子は解放したげる！ここで終わりたくなければ、巻物を置いて、立ち去るのね！」

（……？）

状況は明らかにシカマル達が優勢なのに、音忍の男二人はニヤニヤしている。

（…嫌な予感がする…）

「！！ヤバイ、そいつらは…！！」

サクラが言い終わる前に、男が攻撃をしかけようとする。

「危ない！！！」

ミミは男の攻撃が当たる前に、素早くいのの精神が入っているキンの体を担ぎ、攻撃を避ける。

「！？ミミ！？お前、なんでここにいるんだ…！？」

突然のミミの登場に驚くシカマル。

声には出していないが、サクラ達も驚いた顔をしていた。

「そんなことどうだって良いよ！！それよりも…あなた達、正気じゃないわ…仲間をなんだと思ってるの…！！」

「フン…油断したな」

「我々の目的は、くだらぬ巻物でもなければ、ルール通り無事、この試験を突破することでもない…」

「…？」

「サスケ君だよ！」

「「「「！！！」」」」

その時、男の影と繋がっていたシカマルの影が離れる。

（シカマルの影真似はもう限界みたい…）

「その子の術…、相手の精神に自分の精神を潜り込ませ、体を乗っ取る術のようですが…おそらく、キンを殺せばその子も死ぬだろうね」

（こいつ…！！）

包帯男の言葉に、ミミは沸々と怒りが込み上げてくる。

「フン…気にいらないな…」

ミミはよく知る人物の声を聞き、振り向くとそこにはネジとテンテンがいた。

「マイナーの“音忍”風情が…そんな二線級　をいじめて、勝利者気取りか」

「コラ、ネジ。一生懸命戦ってる皆に対して失礼だよ！労いの言葉くらい素直に言いなさい。『お疲れ様』とか、『頑張ったな』とか…ね？」

（ね？っじゃねーよ！！何言ってんだよこんな時に！！）

シカマルは心の中でツッコム。
ミミの天然混じりな発言があったものの、皆に緊迫した空気になる…その時。
ムクッと、サスケが立ち上がった。

「!!サスケ君!!目が覚め…」

サクラの言葉が途中で詰まったことを不思議に思ったミミは、サスケの方を見ると、ミミは目を見開いた。
…サスケの体に、異様な模様がついていた。

「サクラ…誰だ…。お前をそんなにした奴は…」

「…サスケ君…」

「どいつだ…」

「オレらだよ!」

音忍の男が答える。

「サスケ君…その体…!?」

「心配ない…。それどころか、力がどんどんあふれてくる。今は…気分がいい…。あいつが、くれたんだ」

「え?」

ミミは、リーとの対決を見ただけで、サスケのことをよく知らない。

だが、今目の前にいるサスケの様子が明らかにおかしいのは嫌でも分かった。

「…オレはようやく理解した。オレは復讐者…。たとえ、悪魔に身を委ねようとも、力を手にいれなきゃならない道にいる…。さぁて…、お前だったよな」

「いの！そのカッコじゃまきぞえだぞ！元の体へ戻れ！！チョウジとミミもこっちに来い！」

「わっ！」

シカマルはミミの手を掴み、草影に隠れる。

（ヤ…ヤバイ！！解！！）

印を結ぶと、いのは自分の体に戻る。

いのが無事だったことに、ミミは一安心する…しかし、相変わらずサスケの様子はおかしかった。

「ドス！こんな死に損ないに、ビビるこたぁねえっ！！」

「！よせ！ザク！分からないのか！」

ザクと呼ばれた音忍の手がサスケを狙う。

ゴオーッ！！

草影に隠れているミミたちも吹き飛ばされそうになるほど、激しい風が吹き荒れる。

だが、サスケはそれを避け、ザクを殴る。

（つ…強い…！！）

音忍はサスケに完全に押されている。

サスケはザクの背中に回り込み、両腕を後ろに回され、背中を足で抑えつける。

「クク…、お前、この両腕が自慢なのか…」

（！？何をする気なの…！？）

サスケの言葉を聞いて、嫌な予感がするミミ。

その時…。

ゴキッボキッと、嫌な音が響き渡った…。

第１１話「木の葉ＶＳ音」（後書き）

またしても中途半端な所で終わってしまった…。
ミミがちょっと天然キャラになってましたね…。
次回、ミミに新しい友達が…！？

第１２話「砂の友達」

ミミは目の前で起きた出来事に、少なからず驚いていた。
サスケが、敵とはいえ容赦なくザクと呼ばれた男の腕を攻撃する。
そんなサスケに、ミミは多少の恐怖を覚えていた。

「残るは、お前だけだな…」

包帯を巻いた男、ドスを見てそう言うサスケ。

「お前はもっと楽しませてくれよ…」

（あの…首から浮き出てる印みたいなもののせいなのかな…）

少し警戒しながら、その様子を見ていると…。

「やめて！！」

サクラがサスケに抱きついた。

「おねがい…やめて…」

（……）

（！！印が消えていく…）

サスケの体から浮き出ていた印がスゥ…と消えていく。
サクラの声が届いたのだ…。
ドサッと、サスケは倒れこんだ。
そんなサスケをサクラは支える。

「君は強い…」

「「！！」」

「サスケ君、今の君は、ボクたちでは到底倒せない。これは手打ち料…。ここは、退かせて下さい」

そう言ってドスは“地の書”を置いた。

「虫が良すぎるようですが…ボクたちにも確かめなきゃいけないことができました。そのかわり、約束しましょう。今回の試験で次、アナタと闘う機会があるなのなら、ボクたちは逃げも隠れもしない…」

ドスは倒れているザクとキンを担ぎ、その場から立ち去ろうとする。

「待って！！大蛇丸って、一体何者なの？サスケ君に、何をしたのよ！なんでサスケ君に！！」

「分からない…。ボクらはただ…、サスケ君を殺るように命令されただけだ」

そう言うと、そのまま去っていった。

（話がまったく見えない…飛び入り参加の部外者だし、当然か…）

「おい！大丈夫かよ、お前ら！！めんどくせーけど、いのはリーって奴、頼む！」

その時、倒れていたサスケが意識を取り戻す。
サスケは自分自身を、不思議そうに見つめていた。
あと、意識がないのは、ずっと蚊帳の外だったナルトだけ…。

「シカマル…ナルトがまだ起きないけど…」

「どーするか、コイツ！ケリ起こすか！？」

「ボクがやっていい？」

そう言うとチョウジは、どこからか持ってきた木片でナルトの頭を思いきり叩く。

ドカッ！

「ぎゃあああ！！はっ！」

（結構容赦なかったな…）

頭に一つたんこぶができているナルトを見て、苦笑いするミミ。

「みんな、隠れろー！！いや、すぐふせろー！！」

ナルトは、あたりを見回した後そう叫び、地面に這いつくばる。

「あ…、あいつはどこだってばよ!!」

ナルトの忙しい反応に、思わず目をパチクリさせるミミ。

シカマルに至っては、呆れた様子でナルトを見ていた。

「……ふ、あはははは!!ナルトって、凄い天然君だね!…ははは!!」

「わ、笑いすぎだってばよ!!」

「あぁ、ごめんごめん…!」

いまだにニコニコと笑うミミを、ナルトはジ～っと見る。

「…ミミって、笑った顔、結構かわいいってば…」

「え?」

ナルトの大胆発言に、ミミが再び目をパチクリさせる。

ゴンッ!

「いてぇ!!何するんだってばよシカマル!!」

「いや…なんとなく…」

「なんとなくで殴ったのか!?さっきよりは痛くなかったけど酷い

ってばよ！！」

（シカマル、絶対に嫉妬してるわ…）

「あ！！サクラちゃん！！」

「！…何よ！」

シカマルに叩かれて文句を言った後、ナルトはサクラとサスケに近づく。

「サクラちゃん、その髪！！」

ナルトは、サクラの髪が短くなっていることに気づく。

「あ！コ…、コレね…。イメチェンよ！イメチェン！私は長い方が好きなんだけど、ホラ…、こんな森じゃあ動き回るのに、長いと邪魔なのよね！」

「ふぅーん」

納得したナルトが、もう一度シカマルを見る。

「ところで…、何でお前らこんなとこにいんだってばよ！？」

「ふー…、お前に説明すんのがめんどくせー！」

「みんな、助けてくれたのよ」

と、サクラが言った。

「あはは…（私はいのちゃん助けたこと以外何もやってないけどね…）シカマル」

「あ？」

「私、そろそろ行くね。これ以上時間くって、シミズ達に迷惑かけるわけにわいかないからさ…じゃあね！！」

ミミは返答も待たずに、茶々丸とともにその場を素早く去っていった…。

「さて、さっきの戦いで時間くっちゃったしな～…とりあえず塔の方へ向かおうかな…シミズ達もきっと向かってるはずだし…」

そう言うとミミは走って塔の方へ向かう。
しばらく走っていると、近くに知らない匂いを感じとる。

「……誰？」

ミミは警戒しながら、匂いのする方向に向かって喋る。

「…気配は消してたつもりなんだけどなぁ…アンタもしかして、感

知タイプ？」

現れたのは、クリーム色の髪をリボンで二つ結びをしている、ミミより背が低めの女の子だった。
…額宛は砂時計の形をしていた。

「あの額宛のマーク…砂隠れの里…テマリさん達と同じ砂隠れの忍だね！！」

少女は『テマリ』という言葉に、耳をピクリと動かす。

「…テマリ達…砂の三姉弟と知り合いなの？」

「うん！そうだよ！！あ、そうだ！！アナタの名前は？私は犬塚ミミ！！よろしくね！！」

ニコリと笑い、少女の方へ手を差し出す。

「……あのさ、アタシら敵同士だよね？何フツーに握手求めてんの？」

「確かにそうなんだけどさ、テマリさん達の知り合いなら友達になりたいなーって思ったの！…それにアナタ、今巻物持ってないでしょ？」

「！！…よく分かったわね…」

「巻物持った人が一人でいるのは危険だし、囮にしては周りに仲間の匂いがしないから…」

『ちなみに私も持ってないよ』っと、笑いながら少女に言うミミ。
少女はそんなミミにクスリと笑う。

「変わってるわねアンタ……ユキ」

「え？」

「アタシの名前…ユキって言うのよ。まぁ、よろしく」

素直に名前を教えてくれたことを嬉しく思った。
そのまま握手するために、ユキに手を差し出すが、ユキは握手をしてくれなかった。

「？…ユキちゃん？」

「さっきも言ったけど、アタシ達は敵同士よ…」

ユキにそう言われ、悲しそうな表情をするミミ。

「…中忍試験が終わったら、いくらでも握手してあげるわよ…だから、そんな悲しそうな顔をしないの」

「！！…うん！！」

先程の悲し気な表情が嘘のように、満面の笑みを浮かべた。

「アンタは巻物持ってないみたいだし、仲間の元に行くわ。…ミミ！次の試験で…会いましょう！！」

「もちろん！！」

そう言ってユキは、ミミの前から姿を消した。

「ふふ！新しい友達ができて嬉しいな！！」

「何笑ってんだよミミ」

「うわぁ！！」

いきなり後ろから声をかけられ、ミミはビクリと肩を震わせた。
すぐさま後ろを振り向くと、シミズとカノンがいた。

「シミズ！カノン！」

「油断しすぎだ馬鹿。死にたいのか？」

「うっ…ごめん」

ミミは縮こまり、しゅんとした表情で下をうつむいた。

「そんな表情しなくていいだろ？元気出せよ」

「カノン煩い」

「何でだよ！？慰めてるだけだろ！！」

「そんなことは置いといて…」

「俺そんなこと扱いかよ…」

「これ見ろよ」

シミズが取り出したのは巻物。しかも、それはただの巻物ではなくて…。

「そ、それって…！！天の書！？」

そう…今、ミミ達が探していた天の書だった。

「さっき偶然カノンと合流した後、天の書を持った奴等に出くわしてな…奪ってきてやったぜ」

シミズは得意気に話すと、天の書をポーチに入れた。

「さぁ、後は塔の方へ行くだけだ…行くぞ！」

「あぁ！」

「うん！」

「ワンワン！！」

そう言うと、三人と一匹は塔を目指し、森の中を駆け出した…。

第１２話「砂の友達」（後書き）

シミズ達と合流！！
なんかいつも以上にグダグダした気がします…。
次回、中忍の心得と本当の目的を知る。

第１３話「中忍の心得と試験の目的」

あれから、敵の攻撃を退けながら塔へと進んでいるミミ達。
そしてついに、二つの巻物を手に、塔へ到着した。
ミミ達は扉を開け、中に入るが、中には誰もいなかった。

「あれ？誰もいないよ？」

「おかしいな…」

「二人とも、あの看板を見ろ」

シミズに言われ、二人は看板の方を見ると、そこにはこう書かれていた。

『“天”無くば、智を誠り機に備え“地”無くば野を駆け利を求めん　　天地双書を開かば危道は正道に帰す　これ則ち“　　”の極意…導く者なり　三代目』

「う～ん。難しいな…あれ？なんか抜けてる文字があるよ？」

「それについてはこの天の書と地の書を開けば分かる」

そう言ってシミズは巻物を取り出し、カノンと一緒に巻物を開く。
そこに書かれていたのは“人”という字だった。

「両方同じだね」

その時、シュウゥーっと、巻物の“人”の字から煙があがる。

「え！何！？」

「口寄せの術式だ」

シミズとカノンは巻物を放り投げる。
やがて煙がなくなると、そこには人が立っていた。
その人物とは…。

「…建物の中…と、いうことは、合格したんだなお前ら…よくやったぞ！」

「「ヤイバ先生！？」」

ミミ達の担当上忍、ヤイバが巻物から口寄せされたのだ。

「どうしてヤイバ先生が…」

「俺達が途中で巻物を見た時に、何かするつもりだったんだろ」

ヤイバはシミズの答えにニヤリと笑う。

「…もし、お前らが試験途中に規則に反する条件で巻物が開かれた場合…その目の前の受験者には、“第二の試験”終了時刻まで、気絶してもらうよう命じられてた」

「なるほど…」

「ねぇ、先生。あの虫食いになってる壁紙って、どういう意味なの？」

ミミはヤイバにそう尋ねる。

「それは火影様が記した“中忍”の心得だ」

「中忍の心得…？」

「…“天”は人間の頭、“地”は人間の体を指している…そんな所か？」

ヤイバはシミズの言葉に頷く。

「“天無くば智を織り機に備え”…弱点が頭脳にあるならば、『様々な理を学び任務に備えなさい』っという意味で…“地無くば野を駆け利を求めん”…弱点が体力にあるなら、『日々鍛練を怠らないようにしなければなりませんよ』っという意味だ」

「そんな意味があったのか…」

「そして、その天地両方を兼ね備えれば、どんな危険に満ちた任務も正道…覇道ともいえる安全な任務になりえる」

「だとすると、あの抜けた所に入る文字は…」

「そうか！巻物に書いてあった“人”の字だ！！」

カノンはスッキリした顔でそう言うが、そんなカノンをシミズは睨み付ける。

「今俺が言おうとしたこと先に言うな。カノンのくせにふざけんな」

「え！？俺が悪いの！？」

相変わらずのやり取りに、ヤイバはくくく…っと笑う。
そしてまた口を開いた。

「五日間のサバイバルは、受験生の中忍としての基本能力を試すためのもの…。中忍とは、部隊長クラス…。チームを導く義務がある…。任務における知識の重要性、体力の重要性をさらに心底心得ること。この“中忍心得”を決して忘れず、次のステップに挑んでほしい。お前ら…次の試験も頑張れよ！！」

「「「はい！！」」」

三人のはっきりした返事に、ヤイバは安心したように微笑む。

「次の試験、俺はお前らの戦いぶりをしっかりと見せてもらうからな。あんま下手な戦いはするなよ」

「え？先生、私達の戦いを見るんですか？」

「俺だけじゃない。他の班の上忍達も見に来るぞ。恥をかかないよ

うに…気を…つ……」

「……先生？」

段々と声が小さくなっていくヤイバに、ミミは首を傾げる。

「……まさか…」

「あぁ…」

「……ぐぅ……」

「「やっぱり寝てたーーー！！！」」

そう…ヤイバは器用なことに、立ったまま寝ているのだ。
ヤイバは寝ることが好きだ。
話してる途中で寝ることもよくある。
このことはヤイバ班にとっては日常茶飯事になっていた。

「相変わらずだな先生…」

「うわ、寝ながら歩いてる…」

「いつ見ても凄いな…」

三人は、そんな自分達の先生に慣れてはいるものの、ため息をつかずにはいられなかった…。

やがて、ナルト達の班も到着し、これで第二の試験の通過者が全員揃った。

「お、今年のルーキー、全員合格してるじゃねーか」

「随分優秀な奴らが入ってきたもんだな…」

（キバのチームも、シカマルのチームも、ネジ達のチームも残ってる…テマリさん達も…あ！ユキちゃんのチームもいる！！）

この場にいる下忍のチームは９つ。

アンコが、そんな下忍達に向かって口を開いた。

「それではこれから、火影様より“第三の試験”の説明がある。各自、心して聞くように！！では火影様、お願いします！！」

「うむ。これより始める“第三の試験”。その説明の前に、まず一つだけ…。はっきりお前たちに告げておきたいことがある！！」

（なんだろ…？）

「…この試験の真の目的についてじゃ」

（真の目的？）

「何故…同盟国同士が試験を合同で行うのか？」

（どういうことだ？）

（……）

「“同盟国同士の友好”“忍のレベルを高めあう”その本当の意味をはき違えてもらっては困る…！…この試験は言わば、同盟国間の戦争の縮図なのだ」

火影から放たれた言葉にみんなが驚く。

「ど…どういうこと…？」

「歴史をひもとけば今の同盟国とはすなわち…かつて努力を競い合い続けた隣国同士。その国々が互いに無駄な戦力の潰し合いを避けるために敢えて選んだ戦いの場…それがこの中忍選抜試験のそもそもの始まりじゃ…！」

「な…なんでそんなことしなきゃなんねェんだってばよ…中忍を選ぶためにやってんじゃねーのかよ！」

（確かに、ナルトの言う通りだよね…）

火影の言葉にそう言うナルトに、ミミは密かに頷く。

「確かにこの試験が中忍に値する忍を選抜するためのものであることに否定の余地はない…だがその一方でこの試験は…国の威信を背負った戦う場であるという側面も合わせ持つ！」

（思った以上にでかい目的があるんだな…）

「この“第三の試験”には我ら忍に仕事の依頼をすべき諸国の大名や著名な人物が招待客として多勢招かれる。そして何より各国の隠れ里を持つ大名や忍頭がお前たちの戦いを見ることになる」

（なるほど…読めてきた…だから任務などの成功率とかで中忍を決めず、わざわざ試験という形にしたんだな…なら、仕方ないか…）

「国力の差が歴然となれば“強国”には仕事の依頼が殺到する。“弱小国”と見なされればその逆に依頼は減少する」

（頭が痛くなるような話だなぁ…）

「そしてそれと同時に隣接各国に対し“我が里はこれだけの戦力を育て有している”という脅威、つまり外交的…政治的圧力をかけることもできる」

「だからってなんで！命懸けで戦う必要があんだよ…！？」

それでもナルトは納得がいかないらしい。

「国の力は里の力…里の力は忍の力…そして忍の本当の力とは、命懸けの戦いの中でしか生まれてこぬ！！」

受験生達の間で緊張がはしる。

「この試験は自国の忍という“力”を見せてもらう場であり…見せつける場でもある。本当に命懸け戦う試験だからこそ意味があり、だからこそ先人たちも“目指すだけの価値がある夢”として中忍試験を戦ってきた」

「ではどうして…“友好”なんて言い回しをするんですか!?」

「だから始めに言ったであろう!意味をはき違えてもらっては困ると。命を削り戦うことで力のバランスを保ってきた慣習、これこそが忍の世界の友好なのじゃ」

(物騒な友好関係だなぁ…)

「第三の試験前に諸君にもう一度告ぐ。これはただのテストではない…これは己の夢と里の威信を懸けた、命懸けの戦いなのじゃ」

「なんだか凄いね…」

「そんな意味があったなんてな…」

「フム…ではこれより“第三の試験”の説明をしたい所なのじゃが…実はのォ…ゴホン」

どことなく申し訳なさそうな火影の様子にミミ達は首を傾げる。

すると、男の人が火影に近づく。

「…恐れながら火影様…ここからは“裁判”を仰せつかったこの…月光ハヤテから…」

「……任せよう」

「皆さん初めまして。ハヤテです。えー皆さんには“第三の試験”前に…やってもらいたいことがあるんですね…ゴホッゴホッ」

「え、あの人大丈夫なの?体調悪そう」

「……俺、胃薬しか持ってねェ……」

さりげなくそう囁いたカノンの言葉に、ミミは同情の視線を送っていた。

「えー…それは本選の出場を懸けた“第三の試験”予選です…」

「!?」

ハヤテの口から出た言葉に、下忍達が動揺する。

「予選って…、どういうことだよ!!」

「先生…、その予選って、意味がわからないんですけど…。今残ってる受験生で、なんで次の試験をやらないんですか?」

みんなこのことに納得がいっていないようだ。

「えー、今回は…、第一・第二の試験が甘かったせいか…少々人数が残り過ぎてしまいましてね…。中忍試験規定にのっとり、予選を行い…“第三の試験”進出者を、減らす必要があるのです」

下忍達は唖然とする。

「えー、それでは、体調のすぐれない方…、これまでの説明でやめたくなった方、今すぐ申し出て下さい。これからすぐに、予選が始まりますので…」

「…!!これからすぐだと!?」

サスケはアザのある場所をおさえてそう言う。
あの場にいたミミは、そんなサスケの様子に少し心配になった。
ハヤテが辞退を呼びかける。
サクラがサスケに何か言っている。

「うちはサスケ…あいつ、どうしたんだ?」

サスケの様子に気づいていたシミズが疑問を口にする。

「サスケの首に、変なアザがあるの…」

「アザ?」

「あのアザが広がった時のサスケ…なんだか怖かった…」

「……」

シミズはミミの頭を撫でる。

「…何かあれば、俺が守る…チームメイトに手を出す奴は、誰であろうと容赦はしない…」

「シミズ…」

いつもと違い、優しく頭を撫でるシミズの手に、ミミは安心した表情を見せた。
そんなミミ達を、シカマルが複雑な表情をして見ていたことは、誰も知らない…。

その後、薬師カブトが辞退を宣言する。
カブトが辞退することにナルトは残念そうにする。
立ち去るカブトを、シミズは疑い深い視線を送っていた…。

「えー、ではこれより、予選を始めますね。これからの予選は、一対一の個人戦。つまり、実践型式の対戦とさせていただきます。ちょうど２８名なので、合計１４回戦行い…、えー、その勝者が“第三の試験”に進出できますね。ルールは一切無しです。どちらか一方が、死ぬか倒れるか…あるいは、負けを認めるまで闘ってもらいます。えー、死にたくなければすぐ、負けを認めて下さいね。ただし、勝負がはっきりついたと、私が判断した場合、えー、むやみに死体を増やしたくないので、止めに入ったりなんかします。そして、これから君たちの運命を握るのは…」

その時、今まで隠れていた電光掲示板が、姿を現した。

「これはですね…。えー、この電光掲示板に…、一回戦ごとに対戦者の名前を、２名ずつ表示します。ではさっそくですが、第一回戦の２名を、発表しますね」

電光掲示板が動き出す。
みんなに、緊張の糸がはしる…。
そして、電光掲示板の動きが止まる…そこに表示された２名は…。

『ウチハ・サスケＶＳアカドウ・ヨロイ』

“第三の試験”予選、開始…！！

第１３話「中忍の心得と試験の目的」（後書き）

長いセリフが多い話ですね。
てか、ヤイバ先生＼／
相変わらずシミズの出番多めだなぁ…。
次回、中忍試験予選試合、開始！！

第１４話「予選開始」

電光掲示板に映された2名に、うちはサスケの名前が出されていた。

「いきなりうちはサスケの試合か…」

カノンがそう囁く。

「では、掲示板に示された2名、前へ…。第一回戦対戦者、赤胴ヨロイ、うちはサスケ。両名に決定…。異存は、ありませんね」

「はい…」

「ああ…」

「えー、ではこれから、第一回戦を開始しますね。対戦者2名を除くみなさん方は、上の方へ移動して下さい」

ハヤテの指示に従い、上の階へ移動する。

「それでは…、始めて下さい！」

ハヤテの言葉を合図に、二人は戦闘に入る。

（意外と大丈夫そうかな…？）

そんなミミの思いもつかの間…。
突如、サスケはグラついてしまい、倒れこむ。
ヨロイが殴りつけるが、間一髪で避けた。

（やっぱり、首筋が痛むんだ…）

（不調な体でどう戦う。うちはサスケ…））

サスケは、持っていたクナイを地面に突き刺し、ヨロイを押し倒す
…しかし、ヨロイはサスケから振り逃げてしまった。

（な…何だ。急に、体の力が…）

「どうしたんだろ？サスケ」

「あのヨロイという男…もしかして…」

ユキの班の中性的な顔だちをした緑色の髪の少年が、サスケの様子
を見て何かに気がつく。

「何か分かったのホシ？」

少年、ホシはユキの言葉にこくりと頷く。

「おそらくヨロイは…うちはサスケのチャクラを奪ったんだ…」

「チャクラを奪う技…厄介ね」

思ったよりも苦戦しているサスケ…そんな中、ナルトがサスケに向かって叫ぶ。

「サスケェ！！てめーはそれでも、うちはサスケかぁ！！ダッセー姿、見せんじゃねェー！！！」

サスケはハッと、ナルトの方に目を向ける。
サスケの目に、隣にいるリーが映る。

（そうか…！）

「よそ見してる暇なんて、無いだろう！！」

ドカッ！！

サスケが、ヨロイを蹴りあげた。

「もっとも、ここからはオレのオリジナルだけどな…」

「くっ…、影舞葉だと…！」

「くらえ！」

その時、首筋にあった黒いアザが、サスケを取り巻くように広がっていた。

（またあのアザが…）

だが、サスケは自分の力で、取り巻いていたアザをおさえこむ。

シュウウ…と、退いていき、アザは見えなくなった。

「いくぜ」

「！！くっ…」

バシッと、蹴りつけるが止められる。

「フッ…。甘いな！」

サスケの追撃は止まらない。

「獅子連弾！！」

勢い良く、ヨロイを地面に叩きつける。

…勝負がついた。

「これ以上の試合は、私が止めますね…。よって、第一回戦、勝者うちはサスケ。予選通過です！」

「やったー！！」

サスケの勝利に、ナルトは嬉しそうに声をあげる。

（アザも消えたし…なんかホッとしたよ……ん？）

安心したミミの目に写ったのは、ユキと一緒に会場の外へ出るネジ

の姿…。

（なんだろ…？）

気になったミミは二人の後を追うことにする。

「あ？どこに行くんだ？ミミ姉ちゃん？」

どこかへ行こうとするミミに、キバは声をかける。

「まぁ…ちょっとね…あら？」

電光掲示板に、第二回戦の2名が示される。

第二回戦…『ザク・アブミＶＳアブラメ・シノ』。

「シノ…て、キバのチームの…」

ミミはシノの方を向く。

「あぁ…次はオレの番だ…」

「そっか！！頑張って勝ってね、シノ！！」

「…そのつもりだ」

ミミはしっかり弟のチームメイトに応援の言葉を贈ると、ネジとユキの後を追った…。

「あ！いたいた…」

ネジとユキの姿を見つけたミミ。

「……久しぶりだね、ネジ…」

「あぁ……」

（え？あの二人、知り合いだったの…）

意外な事実に驚くミミ。

「前はあんなに可愛かったのに、今では態度がちょっと冷たくなったんじゃないの…？」

「フン…」

（ネジが可愛い…？）

ユキの言葉に、失礼ながら眉をひそめるミミ…すると…

…ちゅっ…

「んっ……」

（……え？……えええええぇぇぇ！！！？）

ミミは目の前の光景に驚きを隠せない。

…ネジとユキが…キスしたのだから…。

（え！え！何！？／／／あの二人って、付き合ってたの…！？／／／）

ミミの頭の中はパニック状態だ。

「ネジ…」

「ユキ…」

（はわわわわ！！！／／／）

見ていて段々恥ずかしくなってきて、顔を赤くしたまま、その場から去っていった…。

ミミが戻ってきた頃には、決着がついていた。

どうやらシノがザクに勝利したようだ。

「あ…、シノくんおつかれ…さま」

「やったな、オイ！」

「うむ…、お前たちにも、期待してるぞ」

（くっ…。こいつ、チームのリーダーみたいなノリで帰ってきやがって。くそっ！）

「その心配はないよ！！キバは私の自慢の弟だからね！！…あ！シノ、通過おめでとう！！」

キバの背中から現れ、そういい放つミミ。

「ミミ姉ちゃん！…なんか顔赤くね？」

「え…」

先程のネジとユキのキスを見て、まだ頬の赤みがとれてない状態でいた。

「あ～…気にしないで！大丈夫だから！！」

「ふ～ん…なら良いけど…」

誤魔化すように笑うと、シミズ達の元に戻って行った。

「どこ行ってたんだお前…」

「いや、まぁ…いろいろ」

「意味分からん…」

「あ！三回戦の2名が決まったぞ！！」

三回戦…『ツルギ・ミスミＶＳカンクロウ』

「あ！カンクロウさんの試合だ！」

次の試合は、ヨロイと同じチームの男と、砂隠れのカンクロウだ。

「頑張って、カンクロウさん！！」

カンクロウは、木の葉の忍なのに自分を応援するミミに驚いた顔をする。

まぁ、当然の反応だろう。

当人のミミはニコニコしているだけだった…。

「それでは第三回戦、始めて下さい」

「オレはヨロイと違ってガキでも油断は一切しないぜ。始めに言っておく、オレが技をかけたら最後…必ずギブアップしろ。速攻でケリをつける」

「ならオレも…速攻でケリつけてやるじゃん」

トン

カンクロウが背中にしょっていた物を置いた。

ミスミがカンクロウに向かっていく。

「何もやらせはしない、先手必勝！」

グルン

「！なに！？」

「なっ…！？」

「やだ！何あれ！？」

「……気持ち悪っ」

ミスミはカンクロウに全身で巻き付いている。
端から見るとかなり異質だ。
シミズに至っては気持ち悪がっている。

「あらゆる間接をはずすことで体がグニャグニャになり、それをチャクラで自在に操っている…どこでも忍びこめるあの体は、情報収集にはうってつけだな…」

ミスミの技を見て、冷静に分析するヤイバ。

「あんなにキツく絞められたら、最悪骨が折れる危険性がある」

「そんな…！！」

「早くギブアップしろ」

「へっ、ヤダね」

「！死にたいのか…！」

「ぐっ…死ぬのはてめーじゃん？」

ゴキ……

「チィ…バカが……勢いあまって殺しちまったじゃねーか…」

「うそ…首の骨が…」

ミミはショックを受けている。
だが、ホシはそんな様子を見て、目を細める。

「これは…あのミスミという男の負けだな…」

「え…？」

ホシの言葉が聞こえたミミは、疑問符を浮かべる。
その時…。

「じゃあ今度はボクの番♡」

「！！な…なに！！？」

バッ！

ギリギリ…バリバリ

ギギギギ

「ぐっ、こ…これは傀儡人形！！」

「あいつ…傀儡使いか…」

巻かれた包帯からカンクロウが出てくる。

本体は最初からそこに隠れていたらしい…。

「骨まで砕けばもっとグニャグニャになれるじゃん…」

「ぎ…ギブアッ……」

バキッ！

「あぐわあああああ」

「ただし…首以外にしといてやるよ」

圧倒的勝利だ…。

「試合続行不可能により勝者カンクロウ！！」

「傀儡の仕掛けをほとんど使わずに倒したな…砂の忍…強者だな…あれ？ミミ？」

ミミが砂隠れのチームの元に行くのを見たヤイバ。

カンクロウがステージから戻ってくるやいなや、好奇心旺盛な目で傀儡を見る。

「すごーい！！ねぇ、なんて名前の傀儡なの！？」

「あ…あぁ…カラスってんだ…」

そんなミミに、少し苦笑いしながら言うカンクロウ。

「カラス…！！カッコいいね！カンクロウさんって、手先が器用な

んだね！！…あ、そうだ…カンクロウさん、通過おめでとう！！」

ミミはカンクロウを見て、ニコリと笑う。

「…っ！！／／／あ、あぁ…／／／／」

心なしか、カンクロウの顔が赤くなる。

そんなカンクロウに気づくことなく、ミミは元の場所に戻る。

「どうしたカンクロウ…顔が赤いぞ」

「……あいつって、あんな可愛かったんだな…」

「はぁっ？」

もちろん、こんな会話がされていたことも知らない…。

「！…戻ってきたかユキ」

サスケの試合後、ネジと一緒に会場を出たユキが戻ってくる。

「遅くなったわね…」

「うふふ…彼氏さんとの再会がそんなに嬉しかったのかしら…」

髪の長い綺麗な女性がからかうように言う。

彼女はユキ達の担当上忍の先生である。

「からかわないで下さいよ、エルナ先生…」

「あら、ごめんなさい…」

顔は笑ったままでそう言うエルナ。
ユキは思わずため息をついた。

「ミミ姉ちゃん！！」

「ん？どうしたのキバ？」

戻ってきたミミに、キバが駆け寄ってくる。

「姉ちゃん！あんまりあいつに近づかない方が良いぜ！！」

「？あいつって…カンクロウさんのこと？」

「そう、そいつ！！あいつ、絶対ミミ姉ちゃんに気がある…あの砂の忍だぜ！？変なことされるぞ！！」

どことなく必死なキバに、ミミは首を傾げる。

「変なことって…カンクロウさんはただの友達だよ？」

「なんか勝手に友達扱いされてるぞ…」

カノンがそう言う。

「もしかして、私がかまってくれないから拗ねてるな…？もう！！キバ可愛い！！」

ミミは緩んだ顔でキバを抱き締める。

「ムギュ！！く、苦しいって、ミミねーちゃん…！！」

胸に押しつけるように抱き締めるミミに、少し苦し気な声を出すキバ。

それに気づき、ミミは『ゴメン　』っと言うと、キバを解放する。

「と、とにかく！あんまりあいつに近づくなよ！！」

「オレもキバに賛成かな…」

「シカマル…？」

突如会話に入ってきたシカマルに驚くミミ。

「どうしてそう思ったね、シカマル？」

「……教えんのめんどくせェ…」

「ちょっと！はぐらかさないでよ！！」

「急にどうしたんだ、シカマルの奴…」

シカマルの行動を不思議に思う、シカマル達の担当上忍、猿飛アスマ…。

「実はね先生！シカマルってばね…」

アスマに耳打ちするいの。

いのの言葉を聞いたアスマが少し驚いた表情になる。

「ほぉ…あのシカマルがねぇ…」

「アスマ。いのに何吹き込まれたんだ…」

「いいや、別に…」

クツクツと笑うアスマに、シカマルはため息をついた。

「ほら、次の試合が決まったみたいだぞ」

電光掲示板に示された名前を見る。

第四回戦、『ハルノ・サクラＶＳヤマナカ・イノ』

恋のライバル同士の激突が幕をあける…。

第１４話「予選開始」（後書き）

シノの試合を抜かしてしまった…シノ好きな方、ゴメンなさい！！
新たな恋愛要素も増え、バトルシーンが続きます！
次回、サクラとイノの対決！！

第１５話「恋のライバル対決」

「次の対戦は、サクラといのか…」

「恋のライバル対決だね！！」

「ドロドロした戦いになったらヤダなぁ…」

ミミ達がそう言っている間に、サクラといのが下に降りる。
試合開始の合図があった後、サクラがいのに挑発的な言葉をかける。

「今となっては…アンタとサスケくんを取り合うつもりもないわ！」

「なんですってー！」

「サスケくんとアンタじゃ釣り合わないし…もう私は完全にアンタよりも強いしね！眼中ナシ！！」

「サクラ…アンタ誰に向かって口きいてんか分かってんの！！図に乗んなよ泣き虫サクラがー！！」

「うっ…なんかさ！なんかさ！サクラちゃん言い過ぎだってばよ…

いのの奴すんげー目してコエーもん」

「んー…サクラはいたずらに自分の力を誇示したり…人を傷つけるような子じゃあない。いのに容赦されたり手加減されるのが、イヤなんだよ」

サクラがいのを見る目は、とても真剣で、本気であることが伝わってくる。

「ライバルの存在は、結構必要だと思うぜ。お互いに競い合うことで、強くなれる…俺とリーは友人だけど、それと同時にライバルでもある…あいつらの気持ち…少しは分かるよ…」

『なっ？』と言い、リーの方を向く。
リーはそんなカノンに、グッと親指を立てた。

「！始まるよ！！」

サクラといのは額あてを、額につけている。
先に動いたのはサクラ…分身の術を使い、いのに向かっていく。

「忍者学校の卒業試験じゃないのよー、そんな教科書忍法で私を倒せると思ってんのー！」

「でも、サクラちゃんの動きは速いよ！」

「！！」

ガッ！

「キャ！！」

サクラの攻撃がいいのに当たる。

「今までの泣き虫サクラだと思ってると痛い目見るわよ。本気で来てよ、いの！」

「そう言ってもらえると嬉しーわ…お望み通り…本気でいくわよ……！！」

「サクラはチャクラを使った基本動作が得意みたいだな…基本がしっかりしてるのは悪くないが…はっきり言ってまだまだ弱いな。相手が互角のレベルだから良かったものの…違う相手ならすぐやられるだろうな」

「もう、シミズは辛口だなぁ…」

シミズの発言に、困ったように眉をよせるミミ。

シミズが言ってたように、二人の実力は互角…試合は当然長引いている。

二人の息もあがりはじめていた。

「くっ…アンタが私と互角なんてー、あるはずないわよー！」

「フン…見た目ばかり気にしてチャラチャラ髪伸ばしてるあんたと…私が互角なわけないでしょ！」

サクラがまたしても挑発する。

「アンタ！私をなめるのも、たいがいにしろ！」

いのはクナイを取り出すと…。

グッ、ザク

…自分の髪を思いきり切った。

「フフ…単純ね…」

「オラァアアアア！！こんなものー！」

切り離した髪の毛を足元に投げ捨てる。

「……」

「こ…こわいってばよ…」

「サクラちゃん…いのちゃん…」

「さっさとケリつけてやるわ！すぐにアンタの口から参ったって言わせてやるー！」

バッ

いのが印を組む。

その印は、ミミが森の中で見た印…。

（あの技は確か…心転身の術！！）

「焦る気持ちも分かるけど、それはムダよ」

「フン！どうかしらねー！」

「忍法・心転身の術…術者が自分の精神エネルギーを丸ごと放出し敵にぶつけることにより…相手の精神を数分間のっとりその体を奪い取る術…けど…その恐ろしい術には重大な欠点があるわ…まず第一に…術者が放出した精神エネルギーは、直線的かつゆっくりしたスピードでしか飛ばない」

（え！そうなの！？）

「第二に…放出した精神エネルギーは相手にぶつかりそこねてそれてしまった場合でも―数分間は術者の体にも戻れない…さらに言うならその間、術者…つまりあんたの本体は…ピクリとも動かない人形状態！！」

「…実戦はひよっこだが、知識の方はなかなかだな…」

シミズは感心したように言う。

「だとすると…いのが術をはずしたら最後…サクラの勝ちが決定したも同然になる…」

「凄い術だけど…リスクが高いね…」

「だからって何よー！！やってみないと分かんないでしょ！」

「はずしたら終わりよ…分かってるの……ねえ？」

いのはサクラに狙いを定め、サクラは避ける構えを見せる。

「!!バカ!よせ!!」

「!」

「忍法・心転身の術!!」

……

会場が静まりかえる。
いのは膝をつき、サクラは立ったまま動かない…。
勝ったのは、サクラか…いのか…。

「フフ…残念だったわね…いの」

…サクラだ。

ナルトが喜びの声をあげる。
そんな中、シミズは密かに眉をひそめる。

(おかしい…術が発動し、術者が人形状態になるなら、いのの気配はないはずなのに、まだ気配を感じる…まさか…)

シミズはいのの足元を見る。
いのが切った髪の毛が…チャクラをまとい、サクラの足に絡みつく。

「こ…これは!」

「かかったわねサクラー」

「！」

「フー、やっとつかまえたわ♡」

「……まさか……」

「全部…いのちゃんの演技…？」

「あれなら心転身の術が外れることはない…考えたな…」

いのはもう一度印を結ぶ。

「じゃ…心転身の術！！！」

いのの術が発動する。

「ど…どうなったの…？」

「フフ…残念だったわね…サクラ！」

「サクラの中に、いのが…」

心転身の術が成功したのだ。

「なんだ？なんだ？いのの奴？それにそれに…サクラちゃんとも様子が変だってばよ！でも…チャンスだ！！やっちゃえ～サクラちゃん！！」

「ナルトは気づいてないのか？」

「ちょっと…いや、かなり鈍感過ぎてイラッときたから殴り飛ばして良いか…？」

「おさえろシミズ」

「あそこで心転身の術とは…やられたな」

カカシの言葉に、ナルトとリーが驚く。

「心転身…！？…ということは今サクラさんは……」

「ああ…サクラの精神さ完全にいのに乗っ取られた。サクラの中には今いのがいる」

「……！！」

「心転身の術で試合に勝つには…」

「！！サクラちゃんの口から敗北宣言をすること…！！」

サクラの手がゆっくりとあがる。

「私…春野サクラはこの試合…棄権……」

「……ダメだぁっ！！」

「！」

いきなりナルトの声があがる。

（ちっ…ウルサイわねアイツ）

「ここまでガンバって来たのに……サスケバカ女なんかに負けたら…女がすたるぞー！！」

多少、いのに対する暴言を交えて、サクラに叫ぶナルト。

「そのサクラもサスケバカ女だがな…」

ボソリとシミズはそう言うが、ナルトには聞こえていないようだ。

「どうしたんですか？棄権ですか？」

ハヤテがサクラ（いの）に問う。
しかし、サクラの様子がおかしい…。

「棄権なんかして……たまるもんですかーッ！！」

グッ、と両拳に力を入れ、そう叫ぶサクラ。

「！！どうしたんだ！いののヤツ！？」

サクラ　が言った言葉に驚き、叫ぶシカマル。

「クウッ…！！」

サクラの中にいるいのが苦しんでいる。
みんな訳が分からない状態だ。

（駄目…このままじゃ私の方がもたない！！解！！）

いのが印を結ぶと、いのはサクラの体から抜け出し、自分の体に戻る。

「精神が2つあるなんて…あ…あんた何者よ!?」

「ふ…知らなかった?女の子はタフじゃないと生き残れないのよ!!」

「確かにそうだね…」

ミミはサクラの言葉に納得するように頷く。

(あの術にかかればそう簡単に侵入者を追い出せるもんじゃない…いののチャクラ不足…それもあるが　…それ以上に効いたのはサクラの心の内にあるいのという宿敵への闘争心…それがナルトの声が引き金になって呼び覚まされ…いのを追い出したってことか……)

サクラもいのも、どちらもチャクラ切れで疲れきっている。

「この勝負…もしかしたら…」

シミズがそう囁いた瞬間的…。

ガッ!

サクラといの…互いの拳が当り、額あてが落ち、そのまま……気絶してしまった。

「両者続行不可能…ダブルダウンにより―予選第四回戦通過者無し

！」

「えー！！」

恋のライバル対決は、引き分けに終わった。
カカシとアスマが二人を上に連れてくる。

「オイ…いの！」

「サクラちゃん大丈夫かーっ！？」

「ナルト、少し静かに…」

しー…っと、ナルトの口元に指を当てるミミ。
ナルトはそんなミミの行動に思わず照れて頬が赤くなる。
シカマルは眉間にシワをよせると、ミミをナルトからひっぺがす。

「治療班の治療が必要ないぐらいだ…３０分もすれば目を覚ますだろ…」

アスマの言葉に、ホッとする一同。

「しかし…驚いたな…」

「ああ…」

「ナルトとサスケはともかく…あの頼りなかったサクラまでが…こんなに成長してるとはな…」

「いろいろあったけど…この中忍試験に出して良かったと……心か

ら思ってるよ」

そんなカカシ達を見て、ヤイバは目を細め、微笑んでいた。

「う…嘘だろ…」

カノンは目の前の光景に驚きを隠せない…。

第五回戦『テンテンＶＳテマリ』

……結果は、テマリの圧勝だった。

無傷のテマリが持つ巨大センスの上に、ボロボロになったテンテンが気を失っていた。

周りには、テンテンが使った大量の武器。

テンテンの攻撃が、テマリにまったく通じなかったのだ…。

「そんな…テンテンがあんなにあっさりと…」

「テンテンの戦闘スタイルが、テマリの戦闘スタイルと相性が悪かったのも敗因の一つだが…あいて自身、かなりの実力者だ…」

ショックを受けるミミに、冷静に分析するシミズ。
その時、テマリはセンスに乗っかっているテンテンを放り投げる。

「!!テンテン!!」

そのまま激突するかと思ったが、リーがテンテンを受け止めた。

「何をするんです!それが死力を尽くして戦った相手にすることですか!!」

「うるせーな…とっととそのヘッポコ連れて退がれよ!」

テマリの言葉に、リーが飛び掛かるが、リーの蹴りを受け止める。
途中、ガイが降りてきて、リーを止める。

「テマリ…早く上がれ」

上から我愛羅の声が聞こえる。

「勝ち名乗りは受けたんだ…いつまでもそんな見苦しい保護者同伴の男の相手をするな」

「!何ィ…!?」

(我愛羅、テマリさん…)

「…砂の諸君…一言忠告しておきたいんだがいいかな…」

「この子は強いよ…覚悟しといた方がいい…」

ガイが凛とした表情でそう言う。
一色触発の雰囲気は免れたようだ…。

「テマリ…」

ホシがテマリに声をかける。

「あの男の言う通り、いくら圧勝したとはいえ、対戦者に対して失礼だ…」

「なんだいホシ。アンタは木の葉の味方なのか?」

「そういうわけじゃない…本当のことを言ってるだけだ…それに、テマリをこのまま悪者扱いされたくない…」

「…余計なお世話だよ…」

そう言って、我愛羅達の元へ戻る。

「テマリ…」

そんなやりとりの中、第六回戦の二人の名前が示される。
名前を見るやいなや、シミズが下へ降りていった。

「次はとうとうオレの教え子の番か…」

下に降りいくシミズを見て、ヤイバはそう言った。

第六回戦『ミズドリ・シミズＶＳカオル』

第１５話「恋のライバル対決」（後書き）

シカマルが焼きもち（無自覚）やいてる所を書くのが楽しかったです（笑

次回はオリキャラ同士の戦い。

戦闘シーン難しいけど頑張ります！！

第１６話「シミズＶＳカオル」

「次闘うのって…シミズさん！？」

先程のテンテンとテマリの試合途中で目を覚ましたサクラといの。
下にいるシミズを見てそう言う。

「シミズの対戦相手の子、ちっちゃくて可愛い～」

ミミは顔を緩めてそう言う。
シミズの対戦相手は、砂隠れの忍で、ユキと同じチームのようだ。

「あら、ほんと…思わず守ってあげたくなるタイプってやつかしら…」

いのがカオルを見て、そう言う。

「悪いけど、俺は女に手加減するほど甘くないからな…」

シミズがカオルにそういい放つ。
カオルは困ったような表情をするて、口を開く。

「あの…最初に言っときますけど……

ボク、男の子ですよ…？」

……。

『えええええぇぇ！！？』

会場から砂忍以外の驚きの声があがる。

「マジかよ…」

シカマルが唖然とした表情でそう言う。

「「「女の私より可愛いかも……」」」（どよ～ん）

ミミ、サクラ、いのは、男なのにそこらへんの女よりも可愛い事実に、女としての自信が失われていく瞬間だった…。

「ゴホン…えー、それじゃあ始めてもよろしいですか？」

「……あぁ…」

「はい」

「それでは第六回戦…始め！！」

シュッ！

先に攻撃を仕掛けたのはシミズ。
まずは様子見なのか、クナイを数本投げる。
カオルは投げられたクナイを軽々と避け、シミズに向かって蹴りを入れる。
シミズは、カオルの蹴りを受け止める。

ガツンッ！！

「っ！」

ザザーッと、シミズの体が後ろに勢いよく下がる。

「え！？」

「何だ、あの蹴りの威力…！」

シミズは蹴りをガードした腕を擦る。
カオルはシミズに追撃するため、再び突っ込む。
シミズは忍具ポーチから煙玉を取り出し、自分の足元に投げつける。
モクモクと煙は広がり、カオルの体が煙に包まれた。
シミズは煙から出て、もう一度クナイを投げる。
カキンっと、クナイが弾かれる音がする。

「そこだ！！」

煙から飛び出してきたカオルが、シミズを捕まえる。

「――圧迫砲」

手をシミズの胸元に持っていくと…。

ドウンッ！

空気が圧迫し、シミズのお腹辺りがベコンっとへこんだ。

「ひっ…！」

その様子に、サクラは思わず顔を青ざめる。

「シミズ！！」

ミミが叫ぶ。

「…！？」

パシャンッ…

シミズの体が急に水になる。

「水分身か…」

カカシがそう囁く。

「！！」

カオルの後ろから、印を組んだシミズが現れる。

「…水遁・水槍！」

手を口に添え、勢いよく水を吹き出す。
一本の槍のように、カオルに向かって放たれる。
カオルはギリギリの所でそれをかわした。

「チッ…」

攻撃をかわし、またシミズに向かっていく。
シミズは離れようとするが、少し遅く、背後に回りこまれる。
カオルの手にチャクラが集中する。

「背骨断罪（せこつだんざい）」

カオルの手が、シミズの背中へ向かう。

「避けろ、シミズ！！」

カノンが必死な声で叫ぶ。
背中に直撃する数センチで、シミズはしゃがみこみ、カオルの足を引っ掻ける。
危うく転びそうになるが、受け身をとり、すぐ立ち上がる。
クナイ…ではなく、大きめの釘を四本取り出し、シミズに投げつける。
シミズは体を上手く回転させ、追撃を免れる。

「す…凄いってばよ…」

「あのカオルっと子も凄いけど…シミズさんも…強い…！！」

目の前で繰り広げられる戦闘にみんな目が離せないでいた。

「さすが。砂隠れの忍…そう簡単には倒せないか…」

ヤイバは頭をかき、そう囁く。

（最初の圧迫砲…空気の圧迫で、俺の水分身の内臓が潰れかけてた…背骨断罪…なんとか当たらずにすんだが、もし当たっていたら…背中の骨にヒビが入るかも知れない…いや、下手すれば折れる可能性もある…それに、最後の釘の攻撃…）

チラリと、自分の後ろの壁に刺さっている釘を見る。

（あの投げ方や、壁に刺さった釘の位置を見るかぎり…手足に打ち込んで、俺を壁にはりつけにするつもりだったな…）

シミズはギロリとカオルを睨み付ける。

（虫一匹殺せない女みたいな顔してるくせに…見た目とは裏腹に、戦い方が残忍だ。俺を殺す気かよ…あいつの戦闘スタイルは、少ないチャクラですむ体術…接近戦を許せば命取りになる…）

カオルがまたシミズに向かっていく。

シミズは印を結ぶ。

「水分身の術！」

水でできたシミズが現れ、本体の代わりにカオルへと向かっていく。

「水分身じゃ、あいつの体術は崩せないぞ！？」

「シミズ…！！」

ミミは祈るように手を組み、シミズが勝つこと信じる。

「シミズのことだ…何か考えがあるんだろ…」

ヤイバは慌てる様子もなく、シミズを見やる。
カオルは自分に向かってくる水分身のシミズに、拳を構える。
そのままパンチを繰り出す…その時。

パァンッ！

「え！？」

拳が当たるより前に水分身がただの水になる。

「はあぁーーー！？水分身が自滅したってばよーー！！」

「どういうことだ…」

思わぬ事態に、ホシは疑問を浮かべる。

（まぁ、ボクは本体にしか興味はないし…このまま本体に……！？）

バタンッ！

カオルは勢いよく床に激突する。

「ど…どうなって…」

「！あれは…」

シカマルが何かに気づく。

「どうしたの、シカマル？」

「何か分かったの？」

ミミといのが、シカマルに問いかける。

「カオルの右足を見てみろ」

シカマルに言われて、ミミ達は、カオルの右足を見る。

「え！」

なんと…カオルの右足が塊によって、動けなくなっている。

「い…いつの間にこんな…どうやって…」

「その塊は、さっきの水分身の水を使った」

「水分身の水…！？」

「さっきお前が殴るより前に、水分身が破裂しただろ？…あれ、俺がわざと水分身の術をといて、ただの水に戻したんだ」

「殴る前に破裂したことに驚いたカオルは、無意識に走るスピードが落ち、油断が生まれた…そこをついたんだな…」

ヤイバはニヤリと笑い、そう言う。

「だけど、水ではボクの足を捕まえることはできない…なのになんで…」

「簡単なことだ……床に落ちた水分身の水をチャクラで凝固させただけさ…」

「ぎ、ぎょーこ…？なんだってばよそれ…」

「ギョーザの仲間かなぁ…」

アホな発言をするナルトとチョウジに、シカマルはため息をつく。

「…凝固ってーのは、液体が個体になる現象だ…」

「んん…？」

「水を冷蔵庫に入れると、冷えて氷になるだろ？…それと同じだよ…」

「「なるほど…」」

シカマルは『めんどくせー』と言いながら、頭をおさえる。

ナルトとチョウジに分かりやすく説明してあげるシカマルに、ミミが見惚れていたことは言うまでもない…。

「うっ…」

「これで終わりにする…！！」

シミズは、“水”と書かれた巻物を取り出し、床に広げると、足にチャクラを溜め、巻物に書かれている“水”の字を踏む。
そうすると、巻物から水が出てくる。
そして、シミズが印を組むと、水がふわふわと大きな玉となって浮かぶ。
カオルはなんとか抜け出そうとするが、塊に体温を奪われて、思うように動けないでいる。

（まずい…！！）

「水遁・水弾丸」

浮いている大玉の水から小さな小粒の水が大量に出てくる。
そして…まるで弾丸のように凄まじいスピードでカオルに目掛け、放たれる。

バシッバシッ！

ダダダダダ！！

「あああああぁぁ！！！」

小さな水玉が、カオルの体を攻撃する。
右足の塊はただの水になり、自由になるが、この攻撃から逃げるこ

とはもうできなかった…。

「…勝者、水鳥シミズ！」

決着はついた…。

「…し、シミズって、あんなに強かったのか…」

ナルトが唖然とした表情でそう言う。
ナルトだけでなく、ルーキー達はもちろん。ユキや我愛羅達砂隠れの忍や、音隠れの忍も驚きを隠しきれていない。

「水鳥シミズ…日向ネジと去年のＮｏ．１ルーキーの座を争った男…まさか、これほどとはね…」

カカシは予想以上のシミズの実力に、表情には出さないものの、少なからず驚いていた。
アスマや紅、砂隠れの上忍であるバキやエルナも目を見開いていた。
カオルが担架に乗せられる。
エルナはハッとして、気絶しているカオルを見る。

「…あなたはよく頑張ったわ、カオル…」

こうして、シミズとカオルの戦いは終わった。

第１６話「シミズＶＳカオル」（後書き）

戦闘シーン難しいよ！！
えと…矛盾だらけだったらごめんなさい…。
作者は頭が弱いので、ミミ達の戦闘の時もこんなグダグダした感じになるかも知れません…。
シミズの戦闘力は強めということは最初から決めていましたが、どうなんでしょうか…？
次回はシカマルの戦い！！

第17話「想い人の戦い」

戦いを終えたシミズが上に上がってくる。
ミミとカノン、ヤイバがシミズに駆け寄る。

「シミズ！お疲れさま！」

「相変わらず凄かったな！！」

「…シミズ、予選通過、おめでとう」

シミズは、恥ずかしいのか、三人から目を反らし、頭をかく。

「…まさか、カオルが負けるなんてね…」

「強かったな、あいつ…」

ユキとホシが悔しそうに言う。

「中忍試験はそんなに甘くないってことかしらね…」

エルナがそう囁く。
電光掲示板に第七回戦の2名が示される。

第七回戦『ナラ・シカマルＶＳキン・ツチ』

「！…次はシカマルの番だ…」

ミミはチラリとシカマルを見る。

「なんだ？次はお前の好きな奴か？」

「ちょっと！ヤイバ先生！！／／／」

からかうように言うヤイバに、ミミは顔を赤くさせ、シーッと口元に指を当てる。

「シカマル」

「あ…？」

めんどくさそうにしているシカマルを呼び止めるアスマ。

「頑張って勝って、ミミちゃんとやらに良いとこ見せてこいよ」

「そーよ！負けたらしょうちしないんだからねー！！」

アスマといのはニヤついた表情でシカマルを見て、そう言う。

「何言ってんだよ、めんどくせー…」

シカマルは下に降りていった。

「し、シカマル！」

下にいるシカマルに声をかけるミミ。
シカマルはミミの方を見た後、相手に向き合う。
試合は始まった…。
シカマルが印を組む。
シカマルの影が、キンの方へ動く。

「あれが奈良一族の秘伝忍術・影真似の術か…」

ズズズ

キンは影に捕まらないよう距離をとる。

「バカの一つ覚えか…そんな術…お前の影の動きさえ見ていれば怖くないんだよ！！」

「！」

キンが投げた武器は千本。

チリンチリン

その千本には鈴がついていた。

「古い手使いやがって…お次は鈴を付けた千本と付けてねーフツーの千本を同時に投げんだろ！！鈴の音に反応してかわしたつもりでいたら―音のない影千本に気付かずグサリ…そうだろ？」

「おしゃべりな奴だ！」

「たった一回の攻撃でそこまで見破るなんて…やるなあいつ！！」

カノンは感心したように言うが、シミズはまだ無表情だ。

「いや、まだ何かあるぞ…」

チリンチリン

「！！」

「シカマルの背後から鈴の音が聞こえる！！」

（くっ…今のは糸で鈴を鳴らして…ナメやがって！！）

「遅い！！」

「！！」

ドス、ドス

「シカマルゥ！！」

キンの投げた千本がシカマルに当たる。

その時、シミズは違和感を感じていた。

（何かおかしい…一見フツーに見えるけど何か…糸に影が……！！

まさか…）

シミズは先程から感じていた違和感の正体に気づく。

「影がかわされては手も足も出ないだろ…そしてこれがとどめ…！」

キンの言葉が途切れる。

「フー…ようやく影真似の術成功…」

「！！」

「え…？」

「どういうことだ！？」

ミミとカノンは驚きを隠せない。

シミズは『やはりか…』っと、囁いた。

「な…何を言ってる！！？そんな…お前の影などどこにも…」

「まだ気付かないのか！？」

「！！ま…まさか…！！」

キンは自分が操る糸を見る。

「そのまさかだバーカ！こんな高さにある糸に…影が出来るわけねーだろ！！」

「なるほど…そういうことだったのか！！」

「シカマル、凄い！！」

一気にシカマルが優勢になる。

「オレは自分の影を伸ばしたり縮めたり自在に操れんだよ！限界はあるがな」

「影を糸のように細くし、それがあたかも糸の影であるかのように見せて、相手の影を捕らえたか…アスマさんの生徒、凄いな」

ヤイバはアスマとシカマルを交互に見てそう言った。

カチャ、カチャ

「！！バカが！お前とアタシはまったく同じ動きすんだよ！攻撃してみろ、お前もキズつくのは…」

「ンなこたァ分かってんよ！」

「ま…まさかお前…！！」

シカマルが手裏剣を出す。
その動きに合わせてキンも手裏剣を出す。

「手裏剣の刺し合いだ、どこまでもつかな！」

「バカ…よしな！」

「シカマル…！」

ミミは不安な表情でシカマルを見る。

お互いに手裏剣を投げる。

シュルル

だが、どういうことか、シカマルは手裏剣を避ける。
その動きに合わせて、キンもまた避ける。

（フン…しょせんはハッタリか…）

だが…

ゴン！

「！！」

「へへへへ…いっちょあがり…」

壁におもいきり頭を激突させたキンは、そのままドサっと倒れこんだ。

「忍ならな…状況や地形を把握して戦いやがれ！お互い同じ動きをしてもな…オレとお前の“後ろの壁との距離”はお互い違ったんだよ！」

「あの手裏剣は、後ろの壁に注意がいかないように気をそらすためのものだったのか…」

シミズは冷静に分析する。

「いいわよー！シカマルー！！」

いのの声があがる。
シカマルはチームメイトの元に戻ってくる。
そんなシカマルを、ミミはぽ～…っとして見ていた。

（シカマル…カッコ良すぎ…／／／）

シカマルを見て頬を赤らめるミミ。

「ミミ姉ちゃん、何赤くなってんだ…」

顔を赤くするミミを見て首を傾げてそう言うキバ。

「へ！？いや、なんでも…！！／／／それより、私たちの出番はまだなんだね…！」

「今残ってンのは、オレ、姉ちゃん、ヒナタ、カノン、ナルト、チョウジ、ネジ、リー、音の奴、それに砂の奴ら三人だ。頼むからひょうたんの奴とだけは当たらないでくれよ…できればミミ姉ちゃんとも当たりたくねぇな…」

「私もキバとは当たりたくないなぁ…あんまり傷つけたくないもん…」

「ミミ！電光掲示板が動いたぞ！！」

カノンの言葉にミミ達は電光掲示板を見る。

第八回戦『ウズマキ・ナルトＶＳイヌヅカ・キバ』

「来たァ来たァよっしゃー！！おまたせしましたァ、やっとオレの出番だってばよォ！！！」

「うっひょおおラッキー！！あいつなら確実に勝てるぞ赤丸！！！」

「ワン！」

「キバ、油断しちゃダメだよ」

受かれるキバに注意するミミ。

「大丈夫だって！心配すんなよ！オレだってたくさん修業したんだ！！それに、ミミ姉ちゃんにカッコ悪いとこ見せたくねーしな！！」

キバの言葉にミミはジ～ン、と感動する。

「～っ…キバ！！！もう、なんて可愛いの！！そうだね、キバなら大丈夫だよね！！頑張ってね！応援するからね！！」

ムギュ～とキバを抱き締め、興奮気味にそう言うミミ。

「オレは可愛くねーって…」

ムスッとした表情で言うキバに、ミミは思わず胸がキュンとなった。

ミミに開放されたキバは、赤丸と一緒に下に降りていく。

「さて、キバと赤丸の応援をするよ、茶々丸！！」

「ワンワン！」

そしてついに、ミミの弟のキバとナルトの戦いが始まる。
キバはバッ、と印を組む。

（擬獣忍法、四脚の術！！）

キバは四つん這いになり、爪を長く、鋭くして構える。

「行くぜ…」

グッ、ガッ

ドカ！

「もう当分目を開けることはねーぜ…試験官さんよ！！」

キバの攻撃が当り、ナルトが吹き飛ばされる。
周りの人達はやはりか…という気持ちになっていた。

しかし、ナルトは立ち上がった。

「オレを　ナメんなよ！！！」

「「！！」」

「行けー！！ナルトー！！」

（ナ…ナルトくん…！！）

ヒナタは安心したような表情でナルトを見る。
そんなヒナタを見たカノンは内心モヤモヤしていた。

（チームメイトのキバよりもナルトのことを見てる…ヒナタ…もしかして、ナルトのことが…）

カノンは密かに、『キバ、頑張れ…』と言ったことは、シミズとヤイバ以外、知らない…。

「血ィ流して何言ってやがんだ、強がんのもたいがいにしろ！」

「ワンワン」

「手ェ抜いてやったんだってばよ！お前の力を見るのにな！」

「！」

「お前こそ強がってねーで犬でも何でも使いやがれ！！」

「……後悔すんなよ！」

キバはナルトを睨みつける。

（私達犬塚家は、忍犬とのコンビネーションはピカ一…キバ、赤丸とのコンビネーション…見せてあげて！！）

ミミはキバと赤丸を見て、グッ、と拳に力を入れる。
ナルトとキバの戦いは、まだ始まったばかりだ…。

第17話「想い人の戦い」（後書き）

結構アッサリ書けたシカマル戦。
前回が完全オリジナルの試合だったからですかね…？
次回、ミミの弟、キバとナルトの戦い！！

第１８話「弟の戦い」

キバの攻撃に耐え、立ち上がったナルトの挑発を受け、次は赤丸とともに戦うことになった。

「さて、お前の弟がどのくらいの実力か、しっかり見させてもらうぜ」

ミミを横目で見ながらそう言うシミズ。

「いくぜ赤丸！！」

「ワン！」

キバはナルトに向かっていく。
忍具ポーチから煙玉を取り出すと、ナルトに煙玉を投げる。
視界の悪くなったナルトは、キバの攻撃をかわすことができない。

「あのキバって奴、どうやってあいつの位置をああも的確に把握しているのかしら…」

ユキが思わず疑問を浮かべる。

（ミミやキバの一族は忍犬並みに鼻がきく…その鋭い嗅覚のおかげで、ナルトの位置を把握することができる…）

「！ナルトが煙から出てきたよ！！」

ザッ

「！！」

「ワン！」

（かかったな！）

ガブッ

ナルトが煙から出た瞬間、待ち構えていた赤丸がナルトに噛みつく。
ナルトは再び煙の中にはいる。

「うん！ナイスだよキバ、赤丸！！」

やがて、煙が晴れていく…ナルトが倒れており、赤丸がしっぽをふって座っている。

「ワン！」

「ウッヒャァ！！やったぜ！！いいぞ！！」

「ワン！」

「良くやったな赤…！！」

ガブリ

「！？」

なんと…赤丸が、主人であるキバの手に噛みついたのだ。

「！？…どうして…」

「ワン！ワン！」

「え！」

茶々丸の言葉に驚くミミ。

「まさか…あの赤丸は…！！」

ボン！

「ひっかかったなガルルル！！」

「てめー！変化の術で！！くそ！油断しちまったぜ！！赤丸はどこだ！！？」

「！オエー！てめェ犬くせーってばよ！！ぺっぺっ！」

あきらかに逆ギレだ。

赤丸は影分身のナルトに捕まっていた。

「？ミミ…？」

ミミは腕をプルプルさせ、額に怒りマークがついている…。

「ナルトーー！！私の大切な弟の手を噛んだうえ、逆ギレするなんて…キバに対して失礼だよ！！謝って！！」

「落ち着け、ミミ」

ギャーギャー言ってるミミをカノンが落ち着かせる。

（ミミさんって、ほんとにキバ大好きなブラコンね…）

サクラは苦笑いしながらそう思った。

「少しは強くなったじゃねーの…だがもう終わりだ、次はマジでいく！」

「ふーんあっそ！じゃ…オレも！」

「あっそ…じゃないからね！！キバに対して返事適当！！失礼！！」

「だから落ち着けって」

（なんかやりにくいってばよ…）

ミミの言葉に、困った顔をするナルト。

そんなナルトをよそに、ポーチから丸薬を取り出す。

「ナルト！遠慮なくいかせてもらうぜ！」

ピン

丸薬を赤丸に投げ、赤丸がそれを食べる。
すると、赤丸の毛の色が赤く変化していく。

「ガウウッ」

ガッ

「うわっ！？」ボン

赤丸に蹴られ、ナルトの影分身が消える。

「！？毛の色が赤く……！？な…なんだ！？何食わせたんだ！？」

「だから赤丸ってんだよ！」

キバはもう一個丸薬を取り出し、口に入れる。
ちなみに食べさせた丸薬の名は兵糧丸だ。

「いくぜ赤丸！！」

「ワンワン！！」

キバの体の上に赤丸が乗る。
キバは印を結ぶ。

「擬獣忍法！！」

「！！」

「獣人分身！！！」

シュウウウ

赤丸がキバに変化する。

「やっぱり、ミミと同じような戦闘スタイルだな」

キバと赤丸を見て、シミズがそう言う。
キバと赤丸が動きだす。

タン、タン

「いくぜェ！！四脚の術！！！」

「！」

キバがナルトに攻撃を仕掛ける。
ナルトは避けるのがやっとだった。
キバの追撃がきて、ナルトは飛び上がって避ける。

「ナルトに隙ができたぞ！」

キバはそれを見逃さない。

「くらえ！！獣人体術奥義！！」

グルルルっ、とキバと赤丸は体を高速で回転させる。

「牙通牙！！！」

「ぐわあぁぁあ！！！」

キバと赤丸の攻撃が、ナルトに直撃する。

ドサッ

「この辺が実力の差ってやつだ」

「ガハッ」

「やった…！！」

ミミは試合を見て、ガッツポーズをとる。

「オ…レは……火影に……こんな…ところ…で…」

「お前が火影？このオレより弱いのにかァ！？お前、本心じゃ火影になれるなんて思ってもねーくせに強がってんじゃねー！！クク…火影ならな…オレがなってやるよ！！」

高笑いするキバ。

だが、ナルトは立ち上がった。

…ナルトは諦めてはいない。

ナルトの目を見たミミは、なぜだか体が震えた。

「オレと火影の名を取り合ったら…お前ェ、負け犬になンぞ！！」

ナルトの意志の強さが伝わる。
火影という大きく困難な夢を、大勢の前で大声で口にする。

「あいつ…俺が思ってるよりも、強いのかも知れねえな…」

「…？どうしたミミ？」

ミミはうかない表情をしている。
カノンは不思議に思った。
ナルトのキバに対する言葉に、先程のように反発するかと思っていたが、なにも言わないのだ…。

「…不安なの…」

「不安？」

「さっきのナルトを見た時…最初こそキバが絶対勝つと思ってたのに…もしかしたら…キバが負けちゃうんじゃないかって…そう思っちゃった…」

「ミミ…」

「弟の勝ちを信じることができない私は…お姉ちゃん失格かな…」

ミミは悲し気な表情でうつむいた…。

「オイ…何度も何度もしつけーやろーだな。赤丸アレやんぞ！！」

「！！そう何度も同じ手くうか」

「くらえ！！」

「ぐっ」

キバが再び攻撃を仕掛ける。
まだキバの方が優勢だ。
だがその時…ステージにキバが三人になった。

「ナルトの奴、キバに変化したな…フツーならそうすることで相手の攻撃を防ぐうえ、自身はいくらでも攻撃できる…だが…」

「…私達犬塚家の人間には、意味がないわ…」

ミミが目を細めて言う。

「一つ忠告しとく。前は油断して気付くのが少し遅れたが…もう変化の術は効かねー…どーしてかってーと！！」

「！」

「ヒャッホーッ！！」

「ぐあっ！！」

キバは迷いなく一人を殴った。

「におうんだよなぁ…オレ達の嗅覚をナメるなよナルト…」

ミミは胸をおさえ、ホッとしていた。

（そうだよ…キバは私の自慢の弟…負けるなんて…ないよ…なのに…嫌な予感がする…）

「へっ、勝った…」

ボン

「！！」

キバは目を見開いていた。
なぜなら殴られて変化が解けたのは…

赤丸だったからだ。

「赤丸！！」

「ど…どういう……！！」

ミミはナルトが何をしたのか分かってしまった。

（まさか……！！）

「じゃあテメーがナルトかぁ！なめやがって！！」

「！！ダメよキバ！！」

ミミがキバに向かって叫ぶが、キバは殴っていないほうに思いきり殴った。

ボン！　　ズザザ

「！！」

殴られて変化が解けるが、姿を見せたのはまたしても赤丸だった。
キバはまたしても驚く。

「遅かった…！！」

ミミは悔しそうにそう言う。

ボン

「！！」

最初に殴られた赤丸から煙が出る。
そこから姿を見せたのはナルト…。

「オラー！！！」

ガッ

ナルトがキバに一撃をくらわせた。

「キバーーー！！！」

ミミが大声で叫ぶ。

「キバは最初から間違えて攻撃したわけじゃなかったんだな…変化を上手く使ったな…意外とやるな…」

「今の攻撃で赤丸はもう戦えない…」

倒れている赤丸を見て、シミズとカノンがそう言う。

「……クソがぁぁ……」

「へっ…術は良く考えて使え！だから逆に利用されんだってばよ！バーカ！！」

ナルトの言葉にカカシが苦笑いをしたことに、ヤイバは首を傾げていた。

「フー…」

キバが息を吐く。

冷静さを取り戻しつつあった。

「へっ…やっと本気になりやがったかキバ…じゃあ…オレのとっておきの新必殺技でケリつけてやるってばよ！！」

「……え？そんなのいつの間に……！？」

「サクラ知らなかったのか？」

「カカシ先生は知ってましたか？」

「まだ新技を隠し持っていたとはさすがです！」

ナルトの新技は、チームメイトのサクラや担当上忍のカカシも知ら

ないらしい。

「どんな技かは知らねーが！そんかもんさせなきゃいい！！」

キバが手裏剣を投げる。

「手裏剣で隙をつくって攻撃するつもりだな」

「くっ…」

（今だ…擬獣忍法！！四脚の術！！）

キバがナルトの背後をとる。

「くらえー！！」

「いけ！キバ！！」

キバの攻撃がこのまま当たると、誰もが思った。

その時…

プゥ～

「へ？」

「は？」

「……」

突然、ナルトが屁をこいた。

「！！ウギャーー！！」

「キバーーー！？」

ナルトの屁を嗅いでしまったキバは鼻をおさえ、苦しんでいた。

「嗅覚が鋭いキバには地獄だな…」

カノンはキバに同情の目線を送った。

「ぐくぅ…」

「ナルトー！今がチャーンス！」

「くっそー！力みすぎた……だけどこっからが新技の見せどころだってばよ！！」

ナルトは影分身をだす。

「よーしィ！今までやられた分、一気に返すぜェー！！」

「！」

「う！！」

ガッ

「！！！」

ナルトはキバを上に蹴り上げる。

「ず！」　「ま！」　「き！」

「ナルト連弾ー！！」

ゴッ

ナルトがかかと落としを決め、キバを床に叩き付ける。
影分身を使っての連続攻撃。
しかし、どこかで見たような技だ…。

「……

パクりかよ！！？」

長い溜めの後、カノンは思わずツッコんだ。

「勝者うずまきナルト！」

「しゃーんなろー！いい感じー！」

「あのナルトがキバに勝ちやがったぜ！！」

サクラはナルトの勝利を喜び、シカマルは驚いた表情でそう言う。

「キバァ！！！」

ミミは急いで下に降りていき、キバの元へ駆け寄る。

「キバ…キバァ…！！」

ミミは今にも泣きそうな表情で担架に乗せられたキバを見る。

「…ミミ姉ちゃん…はは…かっこ悪いとこ…見せちまったな…」

キバは苦笑いしながらミミを見て言う。

「キバ…」

「そんな顔すんなよミミ姉ちゃん…オレまで悲しくなるだろ…？」

「だって…だって……悔しいんだもん…！！」

ミミの瞳から涙がこぼれ落ちた。

「…すいません、救護班の皆さん…少しだけで良いので、こうさせてください…」

ミミはキバの手を握る。

ナルトは複雑そうな表情で見た後、サクラ達の元へ戻っていく。

戻ってきたナルトにヒナタが、近づいていき、薬をナルトに差し出す。

（ヒナタ…。やっぱり、ナルトのことが…）

ナルトが紅先生に言われ、ヒナタから薬を受けとる。

そんな様子を見て、カノンはまた内心、モヤモヤしていた。

（フン…随分いい気なもんだな…ヒナタ様…）

カノンと同じように、その様子を見ていたネジが、密かにヒナタを睨み付けていた…。

第１８話「弟の戦い」（後書き）

ミミのブラコンぶりがさらに暴走した回でした。
ナルトもやりにくいったらありゃしない（笑
次回、ネジＶＳヒナタ戦！！

第１９話「日向、因縁の対決」

ナルトに薬を渡し終えたヒナタは、キバの元にいく。
その頃にはミミもすっかり落ち着いていた。

「弟が負けたからって泣いちゃうなんて…今思うと、なんか恥ずかしいことしちゃったかな…」

ミミは恥ずかしさで頬をポリポリとかく。
そこへ、薬を持ったヒナタが近づいて来た。

「ヒナタちゃん…」

「あの…これ…キバ君と赤丸にも…」

持っていた薬を差し出す。

「ありがとう、ヒナタちゃん…」

ミミはヒナタから薬を受けとると、キバの手に握らせる。

「次の対戦が決定するぞ」

電光掲示板が動きだす。

第九回戦

『ヒュウガ・ネジＶＳヒュウガ・ヒナタ』

ヒナタは自分の対戦相手に目を見開く。

（…宗家と分家の因縁対決…ネジが何かやらかさなきゃ良いが…）

ネジとヒナタがステージに立ち、向き合う。
カノンは心配そうにヒナタを見つめていた。
ハヤテから試合開始の合図がでる。

「試合をやり合う前に一つ…ヒナタ様に忠告しておく…」

「……？」

「アナタは忍には向いていない…棄権しろ！」

「…！」

ネジの言葉に、ヒナタは目を見開く。
カノンはギリッ…と歯をくいしばる。

「……あなたは優しすぎる。調和を望み葛藤を避け……他人の考

えに合わせることに抵抗がない」

「……」

「そして自分に自信が無い…いつも劣等感を感じている…だから…
……下忍のままでいいと思っていた…しかし中忍試験は3人でな
ければ登録出来ない…同チームのキバたちの誘いを断れず…この試
験を嫌々受験しているのが事実だ。違うか……？」

「…ち…違う…違うよ……私は……私はただ……そんな自分
を変えたくて自分から……」

「ヒナタ様…アナタはやっぱり宗家の甘ちゃんだ」

「え？」

「人は決して変わることなど出来ない！」

ネジは厳しく、鋭い口調でそういい放つ。

「落ちこぼれは落ちこぼれだ…その性格も力も変わりはしない」

ネジの言葉に、カノンの拳に力が入る。

（ネジの奴…ヒナタの努力を無駄だと言うような言い方しやがって
…ヒナタの努力を、何も知らないくせに…！！）

（今のカノン…怖い顔してる…）

怒った顔をしているカノンを見て、ミミはそう思う。

「人は変わりようがないからこそ差が生まれ…エリートや落ちこぼれなどといった表現が生まれる」

ネジのヒナタを責めるような言葉は止まらない。

「…誰でも…顔や頭…能力や体型、性格の良し悪しで価値を判断される」

（ネジ…）

「変えようのない要素によって人は差別し差別され、分相応にその中で苦しみ生きる」

「……」

「オレが分家で…アナタが宗家の人間であることは変えようがないようにね…」

（まるで自分に言い聞かせてるような言葉だな……宗家と分家の差……）

それがなんだよ？自分だけが苦しいのかと思ってるのか…？…世の中には、もっと苦しい思いをして生きてきた奴だっているのを理解していないみたいだな……）

シミズは哀れむような視線で見た。

「今までこの白眼であらゆるものを見通してきた。だから分かる…

！アナタは強がっているだけだ。本心では今すぐこの場から逃げ去りたいと考えている」

「ち…違う…私はホントに…」

（ネジ…どうしてお前はヒナタにそこまで酷いことを…！！）

（“白眼”…日向家の受け継いできた血継限界…写輪眼に似た瞳術だが、洞察力なら写輪眼よりも上をいく代物…だったよな）

始めて白眼を見たシミズが心の中でそう思う。
ネジのヒナタを責める言葉は続く。
ネジの眼に射られたヒナタは怯える。
それにも関わらず、ネジの言葉の追撃は止まらなかった。
私怨によるいたぶりに、カノンは沸々と怒りが込み上げてくる。
今にもネジに飛びつきそうだった。

「つまり…アナタ…本当は気付いてるんじゃないのか…“自分を変えるなんてこと…」

「ネジィ…！！」

「絶対に出来る…”」

「出来る！！！」

「！！」

「……」

「ナルト…お前…」

ネジの言葉をナルトが制する。

「人のこと勝手に決めつけんなバーカ！！！ンな奴やってやれヒナタ！！」

「……ナルトくん…」

「ヒナタ」

「！」

ナルトに続き、カノンもヒナタに声をかける。

「もっと自分に自信を持て…お前の強さはオレが保証する…お前はたくさん努力してきた…あとは自信さえあれば、大丈夫だ…！！」

「カノンさん…」

ナルトのカノンの言葉を受け、ヒナタの目つきが変わった。

「棄権しないんだな。どうなっても知らんぞ」

（私はもう…）

ギン！

「逃げたくない！」

ヒナタは白眼を発動させる。

「……ネジ兄さん……勝負です」

「いいだろう…」

二人は白眼を発動したまま構える。

いよいよ二人の対決が始まるのだ…。

ザッ

二人は同時に動き出す。

ガッ、ガッ、ガッ

二人の攻撃は一進一退の攻防戦だ。

「良いぞ、ヒナタ!!」

「ヒナタちゃん!がんばれー!!」

ミミとカノンがヒナタに声援を送る。

ドコ!

「よっしゃぁあ!!」

「やったか!?」

「……いや……」

「……やはりこの程度か…宗家の力は…！」

お互い当てたはずが、吐血をしたのはヒナタのみ…。

その光景にみんな驚く。

「な…なんでだってばよ!?ヒナタの攻撃だって完ペキ入ったのに！！」

（なぜヒナタだけが吐血したのか…原因はおそらく…）

ヒナタの攻撃を受けとめ、腕の服を捲る。

そこには赤い点々がいくつもできていた。

「！！……ま…まさか…それじゃ…最初から…」

「そうだ…オレの目はもはや“点穴”を見切る…」

（やはりな…点穴を適格につくことで、チャクラを増大させたり止めたりすることができる…それが…柔拳…）

ドカ！

「キャ！」

ズザザザ

「ヒナタ様…これが変えようのない力の差だ。エリートと落ちこぼれを分ける差だ。これが変えようのない現実…“逃げたくない”と言った時点でアナタは後悔することになっていたんだ。今アナタは

絶望しているハズだ」

「……」

「……棄権しろ！」

ネジがそう叫ぶ。

…しかし、ヒナタは血を吐きながらも、立ち上がろうとしている。

「…私は…ま……まっすぐ……自分の……言葉は……曲げない…」

「…！」

「私も…それが忍道だから…！」

ヒナタは立ち上がり、凛とした顔でそう言った。

（その忍道…確か、ナルトも……）

（ヒナタちゃんにとって、ナルトは本当に憧れの人なんだ…）

「来い…」

「！ガハッ」

ヒナタからまた血が流れる。

「ヒナタはもう限界だ…あれ以上攻撃をくらえば…（最悪の場合、死ぬかも知れない…）」

（これ以上ヒナタに辛い思いをさせたくない…けどあいつは…必死で自分を変えようとしている…俺に止める権利なんて……ない……）

カノンは鉄格子に手をかける。

「諦めるなヒナタ！！言っただろ！！お前は強いって！！」

「そうだ！ヒナタ、ガンバレー！！」

（…ナルトくん…カノンさん…）

ヒナタの目に力が戻る。

再びネジに立ち向かうヒナタ。

ドス

「！！ガハッ」

「アナタも分からない人だ……」

もうネジの勝利は確実だった。

「これ以上の試合は不可能とみなし…「…止めるな！！」」

「何言ってんのよバカ！もう限界よ、気絶してんのよ！！」

「サクラ…」

「！…カノンさん」

カノンは苦し気な表情で言う。

「…ヒナタはまだ、戦おうとしている…」

ヒナタはまた立ち上がる。

「…何故立ってくる…無理をすれば本当に死ぬぞ……」

（…やっと私を見てくれてる…憧れの人…それに、カノン…あの人達の前で…）

（何故…！？）

（……格好悪いところは…見せられないもの……！）

ネジのヒナタを見る白眼が厳しくなる。

「ま…まだまだ…」

「強がってもムダだ。立っているのがやっとだろ…この目で分かる……アナタは生まれながらに日向宗家という宿命を背負った…力の無い自分を呪い責め続けた……けれど人は変わることなど出来ない…これが運命だ」

（…あいつは、運命を変えようとあがくヒナタを、一瞬でも怯えていた…）

シミズは目を細め、ネジを見る。

「もう苦しむ必要はない…楽になれ！」

「……それは違うわ…ネジ兄さん…だって…私には見えるもの…私なんかよりもずっと…宗家と分家という運命の中で…迷い苦しんでるのはあなたの方…」

ピク

ネジの目つきが変わる。
ネジがヒナタに突っ込んでいく。

「「！」」

「まさか…ネジの奴…！！」

「お願い…止まって…！！」

ミミは手を組み祈る。
カノンは鉄格子に足をかける。

ガッ

「！！」

ネジの動きをハヤテ、ガイ、カカシ、紅、ヤイバ、エルナが止めに入った。

「ネジ、いい加減にしろ…！宗家とのことでもめるなと私と熱い約束をしたはずだ…！」

「……なんで他の上忍たちまで出しゃばる…宗家は特別扱いか…それにアンタに至っては国すら違うだろ…！！」

ネジはエルナを睨み付ける。

「ゴメンなさいね…私の教え子が止めてほしそうな顔してたから…」

エルナはチラリとユキを見た。

ユキの目は、ネジを睨むように見つめていた…。

第１９話「日向、因縁の対決」（後書き）

別名、ネジ悪者の回（笑
この時のネジはヒナタに対して酷いことしてたからあまり好きじゃなかったな…（いまはもちろん好きです）
次回、ユキの宣言とカノンとヒナタの出会い。

第２０話「ネジとユキ、カノンとヒナタ」

ネジが上忍達に止められた直後、ヒナタがまた吐血し、倒れこんだ。

「ヒナタ！！」

それを見たカノンが真っ先に降り、ヒナタの元へ行く。
それに続き、ミミやシミズ、ナルトも降りた。

（……ナルトくん……私…少し……は変われたかなぁ……
…カノンさん……私のことを強いと言ってくれたのに……私のこと……見守ってくれてたのに……カッコ悪いとこ……見せちゃった……）

「ヒナタ！しっかりしろ…！！」

「カノン」

ネジがカノンの名を呼ぶ。
だが、カノンはネジに振り向くことはない。

「これがオレとヒナタ様との実力の差だ…彼女は…弱すぎる…」

「てめぇ…！！」

カノンがネジに振り返り、殴り付けようとする。

―パンッ

「！？」

「……」

だが、それよりも前にネジの頬を叩く音が聞こえた。

…ネジを叩いたのはユキ…。

「…なんのつもりだ、ユキ…」

「……見損なったわ、ネジ……」

ユキはギロリとネジを睨み付ける。

「アンタが宗家のことをよく思っていなかったことは知ってたわ…だけど、私怨で一生懸命頑張って戦ったこの子を…アンタは殺そうとした…」

ネジは叩かれた頬をおさえながら、ユキの話を聞く。

「……最初の方だってそう…この場所は、本選に勝ち上がるために戦う場所であって…決してこの子を追いつめるためにあるわけじゃない……」

「ユキちゃん…」

「……アタシ…アンタともう口を聞きたくない…」

「!?」

「なんだと…?」

ユキの思わぬ発言に、ミミは驚き、ネジは眉間にシワをよせる。

「ユキさん!落ち着いてください!」

「お前の気持ちは分からなくはないが、いくらなんでもそれは…!」

リーとホシが慌てた声でそういう。

ネジとユキの関係を知っている者達は、焦りの表情を見せる。

「ネジ…アンタがこの子に謝るまで、今後一切口を聞かないわ…今からアタシ達は赤の他人よ…」

そう言ってユキは、上にあがる。

「待て、ユキ!」

ネジはユキを呼び止めるが、宣言通り、ユキはネジとは目を合わさず、答えてはくれなかった。

「チッ…」

そんなユキにネジは舌打ちをする。

「ネジ、お前…いくらヒナタが嫌いな宗家の人間だからって…どうしてここまでボロボロにできる…！！」

「落ちこぼれに厳しい現実を教えて何が悪い…」

「っ！ヒナタは落ちこぼれじゃねぇ！！ヒナタの苦しみも努力も知らねーで…好きがって言ってんじゃねぇ！！」

「忍がそんな見苦しい他人の応援などやめろ！…しょせん落ちこぼれは落ちこぼれだ…変われなどしない！」

「てめェ…！！」

ネジとカノンに不穏な空気が漂う。

「……あのさ、俺から言わせてみれば、どっちも見苦しいんだよ…運命を決めつけるネジも…ここでいつまでもグチグチ言うカノンも…」

シミズは二人の間に入り込み、そう言った。

「グフッ！！」

「！」

ヒナタが苦痛な表情をする。

（ま…まずい。心室細動を起こしてる…本当に殺すつもりだったのか…）

ヒナタの担当上忍の紅がネジを睨む。

「オレをにらむ間があったら…彼女をみた方がいいですよ」

「ネジ！てめェ…ヒナタをこんなんにした張本人がよくそんな口をきけたもんだな！！！」

「カノン！落ち着いてってば！！」

ネジに向かって吠えるカノンをミミがおさえる。

「医療班は何してる！早く！！」

「す…すみません」

「このままでは１０分ともたない！緊急治療室へ運ぶんだ…急げ！」

「医療班…私もついていって良いかしら…？」

「え！？あなたは？」

ヒナタを担架に乗せる医療班に声をかけるエルナ。
砂隠れの上忍の申し出に戸惑う医療班。

「こう見えて私は医療忍術が得意なのよ…充分お役にたてるわよ…」

「で、では、一緒に来てください！！」

「分かったわ…ユキ、ホシ。私は抜けるわね。私が見てないからっ

て適当にやらないでね」

「はい…」

「そのつもりは無いので安心して行ってきてください」

エルナは二人にそう言うと、医療班とともにヒナタを連れて行った。

（ヒナタ…無事でいてくれ…）

グッ…ピチャ

「！…ナルト…？」

ヒナタの血を手につけるナルトを見て、ミミは首を傾げる。

（約束するってばよ……！！）

スッ…

ナルトが、ヒナタの血をつけた手で握り拳をつくり、ネジに向ける。

「ぜってー、勝つ！！」

まっすぐな…迷いのない瞳でそう言った。

「フン…」

「ナルト…」

「……」

暫くその場は静寂に包まれた……。

床にこびりついたヒナタの血を洗うため、しばし、休憩の時間が与えられる。

「ねぇ、カノン。カノンの言葉を聞いてる限りじゃ、この中忍試験でヒナタちゃんに初めて会ったわけじゃないんだよね？」

「それは俺も思った…いつから知り合ったんだ？」

ミミとシミズが、ヒナタとの出会いについて質問する。

「…俺が初めてヒナタを見たのは…下忍になって半年になった頃だ……」

カノンがヒナタとの出会いを話し出す。

「任務帰りに、ちょっと森の中で寄り道しようと思って、森の中に入ったんだ…俺が行った場所は人があまり来なくて、修業できる良い場所だったんだ…そこで初めてヒナタの姿を見たんだ」

―カノンの回想（カノン視点）

「はっ！はっ！」

丸太の木に向かって、一生懸命打ち込む少女がいた。
なんだ…先客がいたのか…。
俺はしばらくの間、少女の修業する姿を見ることにした。

「はぁ…はぁ…」

あれから１０分…ずっと丸太に向かって修業をしていた。
変わった体術だな…。

「……」

休憩をとるつもりなのか、一旦動きが止まり、座り込む。

「…こんなんじゃ…全然ダメ…やっぱり…私なんかが、強くなるなんて…できないのかな…」

「そんなことないだろ！！」

「！？誰！？」

「あっ…」

少女の言葉を聞いて、思わず叫んでしまった…まぁ、良いか。

「驚かせて悪かったな…こんな所で修業か？見た所額あてがないし…アカデミーの生徒だろ？熱心だな」

「え…そ、そんなこと…ないですよ…」

ヒナタは立ち上がり、モジモジしながらそう言った。

ドキッ

思わず俺の胸が高鳴ったのを感じた。

「い、いや、そんなことあるって！あ、俺は火堺カノンって言うんだ…アンタは？」

ちょっと言葉がおかしくなってしまったが、少女は特に気にすることなく、今だモジモジとしながら、口を開く。

「ひゅ…日向…ヒナタです…」

「日向？日向って、あの木の葉のうちは一族に並ぶ名門だよな？凄いじゃねーか！！」

だが、ヒナタは少し悲しげな表情をする。

…俺、なんかまずいこと言っちまったか…？

「えっと…どうしたんだ…？」

「…私は日向…それも、宗家の人間だけど…私は…日向一族の落ちこぼれなんです…」

え！ヒナタって、宗家の人間だったのか！？
けど、落ちこぼれって…。

「私…争うことが嫌で…才能もないんです…現に、妹のハナビには勝てず…父からは見放されています…」

ヒナタ……お前は…落ちこぼれなんかじゃない…

「俺の同期生でな、忍術も幻術も使えなくて、唯一使える体術も人並み以下な、熱血落ちこぼれくんって言われてた奴がいたんだよ」

「…？」

「そいつは言ったんだ…『たとえ忍術や幻術が使えなくても、立派な忍者になれることを証明したい』…ってな…そしてそいつは、体術だけを極めて…本当に体術だけで、立派な忍者に近づいていったんだ…諦めず、最後まで努力した、努力の天才だった…」

「……」

「お前だって諦めず、ずっと努力していれば、落ちこぼれだなんて言えないくらい強くなる…それに、お前の場合は…ただ自分に自信が無いだけなんだ…もっと自分に自信を持て！…お前は強い…俺が保証する！！」

「！！…カノンさん…」

ヒナタは恥ずかしそうにうつむいた後、俺の顔を見る。

「あの…その……ありがとう、ございます…！私、頑張ります…」

そう言ってヒナタは控えめに微笑んだ。

第２０話「ネジとユキ、カノンとヒナタ」（後書き）

カノンのターン！（笑
シミズがでしゃばり気味だったからなぁ…。
そしてネジとユキ、まさかの修羅場モードです！
果たして二人は仲直りできるのか…！？
次回、カノンが戦います！！

第２１話「カノンＶＳホシ」

「……それが、俺とヒナタとの出会いだ…」

「へー！そんなことがあったんだ！！」

「思ったより早く出会ってたんだな…」

カノンのヒナタとの出会い話を聞き、目をキラキラさせるミミ。
シミズは無表情で言う。

「あれ以来、ヒナタの修業を時々見に行ったりしてるんだよ。差し入れ持ってったり、軽い手合わせをしたり…」

「え？そんなこともしてたの？全然知らなかった」

「お前…ほんとにヒナタが好きなんだな…」

「なっ…！！／／／」

「え！そうなの！？カノン！！？」

シミズの言葉に顔を赤くさせたカノンに、ミミは興奮気味で迫る。

「ち、違う！！／／／そりゃあ、ヒナタは努力家で優しいし、…（ボソッ）可愛いし……けど、だからってそんなんじゃ…！」

「ベタ惚れだねシミズ」

「ベタ惚れだなミミ」

「お前ら～…！！／／／」

先程ピリピリしていたカノンの姿が嘘のようだ…。

「えー、お待たせしました。只今より、第十回戦の組み合わせを発表いたします」

ハヤテがそう言うと、電光掲示板が動き出す。

第十回戦『ヒサカイ・カノンＶＳホシ』

「！カノンの出番だよ！頑張ってね！！」

カノンはコクリと頷くと、下へ降りて行った。

相手のホシも、下へ降りてくる。

「なぁなぁ、カノンは強いのか？」

ナルトがミミとシミズに、カノンの強さについて聞く。

「カノンだって君たちの先輩忍者だよ?…強いよ、カノンは」

ミミはニヤリと笑いそう言う。

「オレは砂隠れの里、エルナ班のホシだ…良い勝負をしよう」

「ああ!」

「それでは…始め!」

シュッ、シュッ

「先手必勝だ!!」

カノンが早速印を結び始める。

「!あの印は…」

カノンは利き手を口元に添える。

「―火遁・豪火球の術!!」

カノンの口から勢いよく炎が吹き出される。

ホシは間一髪の所で避ける。

「あの技って、サスケくんが使った火遁技…!!」

「カノンは火遁忍術が得意なんだよ」

ホシの額から汗が流れる。
カノンはグッと拳に力を入れ、ホシに向かっていく。

バシッッ、バシッッ

カノンはホシに拳で攻撃する。
ホシはガードをするが、威力が強いのか、苦痛の表情をうかべる。

「っ…」

「おぉ！カノンの奴が押してるぞ！！」

「その調子よカノーン！！」

「はあぁ！！」

ガッ！

「！グッ…」

ホシの体に、カノンの裏拳がヒットする。

（いける…！！）

カノンはホシに追撃するべく、もう一度裏拳を当てようとする。

フワッ

「……？」

突然、キンモクセイの香りがカノンの鼻を刺激する。
その時、目の前にいたホシが煙となり、消えてしまう。

「!?消えた…影分身の術か!?…いや、それにしては手応えがない…」

一旦立ち止まり、辺りを見回す。

「!?なんだこの霧は…」

視界をおおいつくす白い霧。
まるで自分以外が消えてしまったようだった。

「!誰だ」

霧から人影が見える。しかも、かなりの数だ。
複数の人影がやがて姿を見せる……カノンは目を見開く。

「……俺……!?」

そう…現れたのはカノンと同じ容姿をした者達だった。
同じ容姿で無表情に見つめてくる者達に、カノンは不気味に思う。

(どうなってやがる…ホシの奴はどこへ行った…)

ザッ!

「!!」

謎の人物達が、カノンへ襲い掛かる。
カノンは自分に遅いくる者達を一人一人適格に攻撃する。

「クソッ!!キリがねぇ!!」

それでもカノンは相手の攻撃を上手く退け、攻撃していく。
だが、突然ピタリ…、と攻撃を止める。

「…?」

突然攻撃してこなくなったことに疑問を抱くカノン。

ズズ…ブシャアアァ!!

「な!?」

すると、カノンの容姿をした謎の人物達の腹が破ける。
中から棘のついた大量のツルが飛び出してきた。
ツルはカノンを捕らえるべく、一斉き襲い掛かった。

「くっ…!!」

カノンは印を結ぶ。

「火遁…」

ツルを焼きつくすため、火遁の術を使おうとする…しかし。

ガシャン

シュルル…ザクッ

「ぐあぁ！？」

床からもツルが現れ、カノンの手足を拘束する。
そのツルにも棘がついているので、かなりの痛みがカノンを襲う。

「っ…さっきから不可解なことばかり…ホシの姿が見あたらない…
…！！…まさか…」

すると、手足を拘束しているツル以外のツルが集まっていく。
ツルの中から人が出てくる。

「ホシ！」

現れたのはホシ…棘付きのツルがホシの両腕に絡み付く。
そして…ホシの両腕が薊の槍のようになる。
棘が刺さっているにも関わらず、ホシの腕から血は流れてはいなかった。

「…！この術はやはり…」

「残念だが、これで終わりだ」

ホシは動けないカノンへ、薊のついた腕を向ける。

「……！！」

ズシャア…

そして蘇が…カノンの体に容赦なく突き刺さった…。

「あ…が……ぐあああぁぁぁ！！！」

カノンの叫び声が会場に響き渡った。

「な…何がどうなってんだってばよ！？」

急に叫び声をあげたカノンに、ナルトは訳がわからないというような表情で見やる。

「…よりによって、対戦相手がカノンの一番苦手とする幻術使いとはな…貧乏くじの引きやすい男だな…」

カノンはそのままドサリッ…と倒れこんだ…カノンが負けてしまったのだ…。

「カノン…」

カノンが担架に乗せられ、運ばれていく。
ミミは心配そうな顔で連れていかれるカノンを見た。

「ずいぶんアッサリやられたもんだな…」

ネジが囁く。

「ヒナタ様を庇ったのは、自分も同じ落ちこぼれだから、放ってはおけなかっただけのことか……不様な負け方などして…情けない」

「ちょっとネジ！どうしてそんなこと言うの！！今回は相手が幻術使いだったから負けちゃっただけで、違う相手だったらきっと勝ってたよ！！」

「フン…」

ネジはミミから目を背ける。
ミミははぁ…とため息をついた。

「さっきのことで、怒ってるのかな…」

「けど、情けないのは事実だな。ネジにあんだけ言っといて、相手にあまりダメージを与えれずに発狂して負けたからな…ほんっとに締まりねえ…つうか、不憫…つうか…」

呆れた声色でそう言うシミズ。

「…お疲れ、ホシ」

「あぁ…」

上にあがってきたホシを暖かく迎えるユキ。

「もうそろそろお前の出番かも知れないな…」

「そうね…」

ユキはまだ試合をしていないメンバーを見る。
その中には当然ミミの姿も…。

「お、電光掲示板が動いたぞ」

第十一回戦『イヌヅカ・ミミＶＳユキ』

「！！私とユキちゃんが…」

「……」

ミミはユキと目が合う。

「シカマル～、とうとうミミさんの出番よ！」

「あぁ…」

「応援の言葉くらい贈ってあげたら～？」

いのがにやついた顔でシカマルに向かってそう言う。
いのの言葉に、シカマルはチラリと横目でミミを見た。
ユキから視線をはずしたミミは、シカマルと目が合う。

「あ…シカマル…」

「……頑張れよ」

「！！…もちろん！！」

シカマルがミミから目線を外し、少し気恥ずかしそうにそう言う。
ミミはシカマルから声援を受け、嬉しそうな表情をしたあと、下へ降りて行った。

第２１話「カノンＶＳホシ」（後書き）

幻術ってこんなんだっけ……？？
間違ってたらごめんさない！！
ほんと戦闘シーン考えるのって難しいですね…。
次回、とうとう主人公の対決…！！

第２２話「ミミＶＳユキ」

ミミとユキはお互いに向き合っている。
どちらも真剣な表情をしている。

「まさか、ユキちゃんと戦うことになるなんて思わなかったよ」

「手加減は無用よ…」

「この戦い、おそらくユキの方に部があるな…」

「!?なんでだってばよ?」

まだ戦っていないのに、ミミが不利だと言うヤイバにナルトが疑問を浮かべる。

「ミミがキバの姉ってことはお前も知ってるだろ?…犬塚家は忍犬使いとして代々受け継がれている…そういう家柄はどうしても基本的な戦闘スタイルは同じになってしまう…つまり、ミミの戦闘スタイルはキバと似ている…ナルト、お前との戦いでキバの戦闘スタイ

ルをユキは見ている…ミミの戦闘スタイルが、キバを通してもう知られてしまっているんだ」

「！！」

「まぁ、戦闘スタイルが分かっても、当たってしまえば問題はない…あとはミミがどうやってユキの隙を作るかだな…」

シミズがナルトを見た後、下にいるミミ達を見てそう言う。

「…では、始め！！」

ハヤテの合図がかかる。

「さぁ、行くわよ、茶々丸！」

「ワンワン！！」

ミミと茶々丸がユキに向かって走りだす。
クナイを取り出し、ユキに襲い掛かる。
ユキもクナイを取り出し、応戦する。

カキィン

ギリギリ…

クナイとクナイがぶつかり合う。

タタタ

「ワン！！！」

「！！」

茶々丸がユキの背後に回り込み、噛みつこうと、飛び付いてきた。
気づいたユキはミミのクナイを弾き、しゃがみこみ低い体勢で後ろに下がる。
茶々丸はユキの上を通過してしまう。
ユキは素早く立ち上がり、印を結び始める。

「来るわよ茶々丸！！」

「ワゥン！」

ミミは茶々丸に兵糧丸を食べさせ、自分も食べる。

「忍法・チャクラ手裏剣」

ブオォン

チャクラで手裏剣を作りあげていく。

「はぁっ！！」

ユキの掛け声とともに、チャクラ手裏剣がミミと茶々丸に襲い掛かる。
ミミと茶々丸は避ける。

タラリ…

「！！」

ミミの右腕から少し血が出てくる。

（チャクラの影響で、チャクラ手裏剣の周りも少し鋭い刃物みたいになってるのね…ギリギリで避けてもダメみたいね…）

ユキがまた印を結ぶ。

「雷遁・雷体伝」

「！！」

「あいつ、雷遁が得意なのか…」

シミズがユキの声を聞き、そう囁く。

ミミと茶々丸はいつでも回避できるよう身構える。

…しかし、ユキはクナイを持ち、ミミに向かってくるだけだった。

（？雷遁じゃない…？）

確かに彼女は雷遁と言った…にも関わらずクナイで攻撃してくる。

そのことにミミはもちろん、他の人達も同じ疑問を抱いた。

ミミは不思議に思いながらも、再びクナイを取り出し、ユキに向かっていく。

二人のクナイがぶつかり合った…

バチチ

「きゃああ！？」

突然、ミミの体が電流による痛みを感じる。
ミミは思わず尻もちをついた。

「え!?」

「い、いったいどうゆうこと!?」

サクラといのが突然悲鳴をあげ、尻もちをついたミミに驚く。

「やっぱりあの時、何かやったんだな…」

シミズは先程、雷遁の印を結んでいたユキの姿を思い浮かべる。

「うぅ…なんか、バチバチしたよぉ…」

自分の手を見て呻くミミ。

「バチバチ?…!!まさか…」

「……静電気か…」

シミズとシカマルが冷静に分析し、そう答える。

「さっきの雷遁はアタシの体全体に強力な静電気をまとう術よ…地味な術だけど、体術使いにとってはやりにくいほかないと思うわよ…?」

「っ…」

「やられたな…」

「手加減なんてしないわよ…」

ザッ、とユキがミミの方へ向かう。

ガッ…ビリリ

ドサッ

「うあぁ！！」

ミミは反応が少し遅れ、腹にパンチを入れられる。
パンチが当たった瞬間、再び体に電流がはしる。

「ミミ…！！」

ミミは手足に力をいれ、なんとか立ち上がる。
ユキが再びミミに向かってくる。

「茶々丸！ユキちゃんに触れちゃダメよ！！」

「ワン！」

ミミはユキの攻撃を回避する。

「ユキの体が静電気状態の今、直接攻撃はできないうえ、ガードしても攻撃をくらう…回避するしかねぇな…」

ミミは先程から防戦一方だ。

（このままじゃ勝てない…！！なんとかしないと…）

ミミは必死でユキに対抗する策を考える。
その時、ユキがミミから距離をとり、煙玉を二個取り出す。
ユキは二個の煙玉を同時に投げる。

ボフン

二個使ったので通常の二倍の煙が充満する。
煙の中でミミは少し戸惑っていた。

（ユキちゃんの居場所は匂いで分かるけど、直接攻撃はできない…
クナイを投げつけるしか…）

そう思いクナイを取り出したその時…

シュバアッ

「！？」

突然何かに捕まる感触がする。

（こ…これは…！？）

ミミは目を凝らして見てみると、チャクラが網のようになっている。

（しまった…チャクラの網に閉じ込められた…！！）

やがて煙が晴れていく。

ミミの姿にナルト達が驚く。

「ミミ！！」

「ミミを閉じ込めてるあれって…チャクラ！？」

チャクラ網の中でミミが窮屈そうに倒れこんでいる。

「アタシが作った特性チャクラ網よ…言葉の通りチャクラで作られてる…そう簡単には抜け出すことはできないわ」

もぞもぞと一生懸命動いたり、クナイで切ろうとしたりするが、何も変わらない。

「そろそろケリを…」

「ワン！ワン！」

「！！」

茶々丸がユキのお腹へとタックルする。

バチチ

「キャウン！！」

「茶々丸！！」

今だにユキの体には静電気が帯びているので、茶々丸の体に電流がはしり、ゴロゴロと転がる。

「う～…ワンワン！！」

だが茶々丸は立ち上がった。
ユキを睨み、吠える茶々丸。
相手に触ると危ないと分かっているのにも関わらず、懸命に立ち向かう茶々丸。
主人のミミを守ろうとしている気持ちが伝わってきた。

「茶々丸のやつ…」

「主人を守ろうとする犬の強さは偉大だな…」

ナルトとシカマルがそう言う。

（茶々丸が頑張ってるのに…私がこんなものにいつまでも捕まってるわけにはいかない……！！）

茶々丸の姿を見て、ミミは目をつぶる。

（ミミのやつ…今かなり集中しているな…）

ミミの姿を見て、シミズがそう思う。

「くっ…なかなか素早い…」

ユキは茶々丸に攻撃しようと拳を振ったり、蹴りをいれようとしたりするがなかなか当たらない。

「ワン！」

「！！」

茶々丸がユキの手に噛みつく。

「……？茶々丸が悲鳴をあげない…」

ユキに触れているはずなのに、茶々丸は悲鳴をあげず、噛みついたままだ。

「くっ…！！」

（静電気の持続時間が過ぎた…！）

ホシはユキの異変に気づき、眉間にシワをよせる。

「くそっ！離れろ…！」

「茶々丸、離れて！！」

ミミの声に反応し、茶々丸はユキの手から離れる。

ザリッ

「なっ…かはっ…！？」

なんと、ミミがチャクラ網から脱出し、ユキの背中に引っ掻き傷をいれる。

ユキはそのまま倒れこむ。

「あんた…なんで！？」

ミミが両手を見せる。
ミミの指先一本一本にチャクラが集中しており、その先の方は鋭く尖っている。
まるでチャクラの爪のようだ。

「青鋭角（せいえいかく）…この技でチャクラ網をひきちぎったの…大変だったわ」

（アタシの網を破るなんて…鋭いチャクラの刃物…強力だわ…）

ユキは背中の痛みにふらふらと立ち上がる。

「悪いけどユキちゃん……私の勝ちだよ」

茶々丸がミミの隣にくる。
ミミは印を組む。

「擬獣忍法・獣人分身」

ボンッと茶々丸がミミの姿に変化する。

「あの技は！！」

ナルトがミミ達を見て叫ぶ。
ミミと茶々丸は高速で回転する。

「牙通牙！！」

キバと赤丸が使った技、『牙通牙』が繰り出される。
ユキはは避けようとするが、思った以上に背中のダメージが大きく、
完全に反応が遅れた。

「…！！（やばっ…！）」

ズガガッ

「ぐあぁぁ！！」

ミミと茶々丸の『牙通牙』がユキに命中する。

「ユキ！！」

ホシが攻撃をくらったユキを見て叫ぶ。
ユキはそのまま床に倒れ……気を失った…。

「勝者、犬塚ミミ！」

「……や……やったあ！！」

ミミは喜びの声をあげる。

「やったよシミズ！ヤイバ先生！！」

ミミは上にいるシミズとヤイバを見てそう言う。

「…まぁ、頑張ったな」

「おめでとう、ミミ」

ユキが担架に乗せられ、運ばれる所を見送った後、みんなの所へ戻る。

「ミミ」

「！…し、シカマル…」

シカマルがミミの所へ来る。
ミミは思わず緊張した面もちでシカマルを見る。

「あ～……予選通過…おめでとう…」

「…うん／／／」

シカマルにそう言われ、ミミは恥ずかしそうに下をうつむいた。

…予選終了まで後二試合…。

第２２話「ミミＶＳユキ」（後書き）

主人公のミミも予選試合終わりました！
ほんと、オリジナルのバトルに意味の分からない表現とか矛盾とかあったらどうしよう…。
次回、リーと我愛羅が戦います！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9655z/

木の葉のワンコ娘

2012年1月11日08時49分発行